僕と幻想郷と召喚獣

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と幻想郷と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ２６５３Ｚ

【作者名】
影月

【あらすじ】
バカテスと東方のコラボです。
明久魔改造、咲夜はＰＡＤじゃない（ここ重要）、文才皆無なんですが頑張ります
あと更新ですが思いつきで書くんでいきなり５話進んだりとかまばらです。
ストック？何それおいしいの？
１５指定は残酷描写とうあるためつけています。

挨拶兼補足

初めまして影月です。
このｓｓはバカとテストと召喚獣と東方とちょっとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。
東方キャラ登場（頑張ります）
お話のメインはバカテス本編
過度のブレイク＆ａｍｐ；キャラ崩壊
メルブラ要素あり
等ございます。お気をつけて下さい。
あとキャラ設定ですが、
明久、咲夜は同じ歳、霊夢、魔理沙は２、早苗は明久の一つ下となっております。

そして最後に…咲夜はＰＡＤではない！

では次回に（逃亡）

プロローグ1（前書き）

振り分けテスト日の自宅編です。ではどうぞ

プロローグ1

「Ｚｚｚｚ…」
「…ひ…ろ。…久……てば…」
「う…ん？」
「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」
「ふ…うあぁぁぁ…なんだ…妹紅か…どうしたの？」
朝、なにやら呼ばれたので起きてみると、目の前に妹紅がいた…
彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まぁホントはまだ色々とあるんだけど、それはのちほどに。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう？

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思ってな。幽香もいるし早く着替えてこいよ」
「え、あ…うん、わかったよ」
「…二度寝すんなよ？」
「しないよ！？」
妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替えよう、幽香も来てるらしいし早く行かないとやばい！！
制服に着替えて（間違えても女子の制服じゃないからね！？）リビングに行くと、
「あら、明久おはよう。今日は起きるの遅かったわね」
「幽香おはよう」

声を掛けてきた少女（作者「え？少女（ピチューン」）なんか電波が聞こえたけど無視しよう…

気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。
実際はというと、彼女達は「幻想郷」ということは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけないらしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。

それより・・・

「なんで今日は遅いってわかったの？」
「そこの花から聞いたのよ」
「あ～なるほど」

花から聞いた…聞き様によってはおかしな発言だけど事実である。
彼女達は「～程度の能力」というものを持っており（人間でも持っている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」
その名前の通り、花を操ったり、会話したりできる。

「よし、じゃあご飯作るけど、何かご要望とかはある？」
「「お任せする（するわ）」」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こうしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかった…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…

プロローグ１（後書き）

うん…ｇｄｇｄだ…ｏｒｚ
読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？
１つけてほしい
２いらないかな
期限は４日ほどでお願いします。

プロローグ2（前書き）

テスト時ですね～ここで明久は運命の扉を開く！！（嘘です
一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行っておりオリジナルで
東方儚月抄と似たような事件も起こっているということになってま
す。
なんか自分で首しめそう…

プロローグ2

ｓｉｄｅ明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書けてないだけです。（私を見ないでぇぇぇ、てかメタるなあああｂｙ作者）また電波が…

ま、まぁテストに集中しよう…

ガタッ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん！？大丈夫！？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちょっと先生！？体調を崩してるのにその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」
「……退席……します…」
「では姫路、君は無得点だ」

そう言って、教卓に戻ろうとする教師。ちょっ、まさかこの教師倒れた人間に自分で保健室に行けって言うのか！？

「……しつ…れい…しま…あ…！？」
「！？」

教室を出ようとしたところで、姫路さんがこけそうになったのでとっさにその体を受け止める。

「大丈夫？姫路さん？ほら、掴まって、保健室まで連れて行くから」
「吉井くん…でも…」
「気にしないで」

さすがに、ほっとけないし連れて行こう。

「吉井、何をしている！！早く席につけ！！」
「こんな状態の人を放っておくなんて出来ません！！」
「貴様も、無得点にするぞ！」
「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になったほうがましです」
「待て、吉井貴様！」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし…

「姫路さん、ちょっとごめんね？」
「え？……／／／／／／／！？」
ちょっとあれだけど抱えて（俗に言う、お姫様だっこ）行こう。
ｓｉｄｅ明久ｅｎｄ
ｓｉｄｅ妹紅
やっぱ、明久だよな。
自分よりも周りを大事にする…。私もそんなあいつに助けられたしな…。
（さ～てどうしようかな…）
明久は無得点だし、あいつがいないとこ行ってもつまらないしな…
幽香もそうみたいだし…
いっその事名前無記入で出すかな？
「チッ、屑が…」
そう考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が…
「まったく、あのバカの考えてることはわからん。ましてやあの屑ごときが私を侮辱して…」

…うん、聞き間違いじゃないらしいな…

『『ガタッ！！！』』

あら？音が二つ？気になってそっちを見てみると、すっごい笑顔の幽香が…なるほど考えてることは同じってことだな…

「？何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか！？」

なんか言ってるけどまあいい…

「とりあえず…」

「えぇ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち！？」

「「最低な屑は、お前だ（貴様よ）」」

『『ドゴン！！！！！！！』』

「げふ！！？？」

「じゃあ、私も退席しますね」
「私も退席するわ」
なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…
あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハァ…

ｓｉｄｅ妹紅ｅｎｄ

ｓｉｄｅ明久

なんか教室からすごい音がした気が…気のせいだな…

よし着いた。

「失礼します」
「あら？明久君、どうしたの？」
「永…八意先生いたんですね。すいません急患です」
「そう、じゃあそこのベットに寝かせて」
彼女は八意　永琳。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。

「うん、普通の熱みたいだし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」
「そうですか」
「でも、明久君？テスト中じゃないの？」
「実は……」

とりあえず、さっきあったことを永林に話した…

「ふ～ん…その先生って何て名前？」
「え？鬘先生です」
「そう…フフフ…」

なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。

「で、この後はどうするの？」
「もうテストは受けれないし妹紅と幽香を待とうかと」
「あら、それならお話しましょうか。今暇なのよね」
「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聴いたとこ、永琳が一層笑っていない笑顔になったことだけはここに記そう。

帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（二人は＋2時間）説教を食らった・・・

プロローグ2（後書き）

おまけ

「でもさ慧音、その教師明久のこと侮辱したんだよ？」

「？どういうことだ？」

「あ～それはね（幽香説明中）……っということよ」

「……ほう、でその教師の名前は？」

「～先生（慧音切れてるな…）」

「（切れてるわね…）」

『プルプルガチャッ』

「あぁ、永琳か？ちょうどよかった…実は…ということだから頼む」

「「（ご愁傷さま）」」

後日、この教師は首になったそうだ…（妹紅談

第1話　朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。
でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

第1話　朝の会合

4月…

今日は文月学園の始業式である…

その頃明久は…

「Ｚｚｚｚｚ…」

「…う…ん…Ｚｚｚｚｚ…」

「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなさ…」

「うん？ふあぁ…あ、幽香おはよう」

起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろう？

「…おはよう。ところでそれ、何？（ニコッ」

「え？（隣を見る）…うんまず、理由言いたいから聞いてくれる？」

「まぁ…聞いてあげるわ…」

隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠っていた…遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃったんだろう…

「実は昨日モン○ン３してて…」

「…何時までしてたの？」

「えっと3時くらいまでは記憶がある」

「……」

「……」

「はぁ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって言ってるでしょ…」

「あははは…ごめん…」

「まぁいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」

「えっ・・・」

「それとこれとは話は別よ（ニコッ」

「ハイ、ワカリマシタｏｒｚ」
こうして僕は死亡フラグを立てた…

「明久ごめんな。寝くなっちゃってそのまま寝ちゃった…」
「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけましだよ…」
朝ご飯を作っている途中、起きてきた妹紅が謝ってきた。でもみんな抱き癖があるのだろうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてきてるし
「あはは、まぁ明久なら大丈夫でしょ」
「ひどいな～僕は普通の人間だよ？」
「…普通の人間が砲撃とかを切ったりしねえよ…まぁかっこいいけどさ…／／／（ボソッ」
「？どうかした？」
いきなり顔赤くしてどうしたんだろう？
「いや／／／何でもない／／／」
「そう？ところでさ…」
やっぱりこれは言わなきゃだよね…

「妹紅…やっぱり男子制服で行く気？」
そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…
「ん？あ～、うんだってスカートって慣れなくて…それに似合わないし」
「そうか…僕は似合うと思うけどな～」
「あははは／／／まぁその、ありがとう」
「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ～」
「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝って」
「わかった」
さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

文月学園前

「おはよう、吉井、藤原、風見」
校門前でスーツを着た先生に出くわした。
「おはようございます、て…西村先生」
「おはようございます、鉄人」
「おはようございます、西村先生」
「あぁ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかったか？あと藤原、西村先生と呼べと言ってるだろう」
「気のせいですよ、先生」
「え？かっこいいと思うけどな…鉄人って」
彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。
「まぁいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」
結果が書かれた封筒を鉄人が僕と二人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。
「吉井、先生はお前の行動は立派だと思う。結果は残念だったが…」
「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」
「そうか…」
案の定、Fクラスだった。まぁ仕方ないよね、途中退席だし
「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ！」
「「あいつが明久のことをバカの屑呼ばわりしたからだ（したからよ）」」
「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたら意味がなかろう…」
「うっ…それはたしかに…」
「言いごたえ出来ないわね…」

「まぁ今回は罰も受けているから処分はなしだ…吉井と上白沢先生たちに礼を言っとけよ？」
「「…はい」」
「あはは、気にしなくてもいいよ」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」
「んっ、そうか。」
あまり話しこんでると遅刻しちゃうしね

第1話　朝の会合（後書き）

1話まで書けた…一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。まぁ飲んでも酔いませんけどね。あと生活ですが、ゲームは買うけど日常に余裕があるくらいには節約しています。

暮らしとして

幽香　明久　慧音と妹紅

てな感じにアパートに住んでいます。

第2話　Aクラスと Fクラスのゴリラ（前書き）

…え？ＰＶ２０００超え…？頑張らないとだな…

第2話　Aクラスと Fクラスのゴリラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていこうぜ」
始まりは妹紅のこの一言だった。
「確かに時間あるし、見ていこうか」
「そうね」
少年少女達移動中…

「……」
「アハハハ…」
「何よこれ…」
目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…
「無駄にお金のかかった教室だね…」
「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！。」
「格差社会ってやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性、学年主任の高橋洋子が立っていた。
「あ、やぱりあの先生が担任なんだ…」
「私あの先生苦手だな…」
「私、間違ってもAクラスじゃなくてよかったかも、って今実感したわ…」
これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどうも高橋先生が苦手らしい。
「ははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」
「？？？？？？？はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女、霧島翔子だった

「同性愛者か…」
「「え？」」
霧島翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。
「いや、霧島さんには同性愛者じゃないかって噂があるじゃない？」
「あ～確かにそうだな」
「それがどうかしたの？」
「いや…僕にはそう思えなくてね…もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないと思ってね」
「「そう…なんでこれで自分のことには気づかないんだろう（のかしら）…（ボソッ」」
「？」

「そろそろ教室行こうか」
僕たちはFクラスの教室に歩き出した。
この時僕は、僕たちを見ている銀髪の少女に気づいていなかった。

「ねぇ…僕たちいつの間に別世界に来たのかな？」
「明久、現実を見てくれ…私だって逃避したいの我慢してるんだから…」
「これは…ひどいわね…」
今僕たちが目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だった。
「と、とりあえず中に入ろ。きっと外よりはマシだよ。」
「そうだな…」
「そうね」
そう言って、僕は教室のドアを開いた。

『ガラッ』
「おはよ「さっさと席つきやがれ、蛆虫やろう」う？」
なんだろう、この教室。入った第一声罵倒だった…
「って雄二なんで教卓に立ってるの？」
「そりゃ担任が「「蛆虫やろうとは言い根性してるな（わね）…」」
え？」
罵声を浴びせた少年、坂本雄二はその方に目を向けた。

そこにはもこたn…妹紅とUS…幽香がすごい笑顔で立っていた…
「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね…」
「まて、それはお前たちじゃなくて明久のことで…」
「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて…」
「「覚悟出来てるんだろうな（わよね）？」」
「ち、ちょっと待ってくれ！。言い過ぎた。俺が悪かった！。だから？？？？？？？あ、明久！。助けてくれ！。」
雄二が助けを求めてくる…仕方ない…
「二人とも…」
「「なに？明久」」
「あとでやってもかまわないから、今は席に着こう？」
「「そうだな（そうね）」」
「ち、ちょっと待て明久！？見捨てる気か？！」
雄二は必死に助けを求めるが、
「だって原因雄二じゃん」
僕は切り捨てることにした。

第2話　Aクラスと Fクラスのゴリラ（後書き）

次回のお話は？
とうとう始まった本編、雄二のおとしめようとする策略に明久はどう対抗するのか？
お楽しみに（大ウソです

第3話　自己紹介と粉砕されるちゃぶ台（前書き）

明久の紹介どうしようかな…あと最初の担任変更ｂ

第3話　自己紹介と粉砕されるちゃぶ台

「君たち、そろそろ授業始まるから席につきなさい」
「あ、すいませ…って慧…上白沢先生…」
後ろから声がかけられたので振り返ってみると、そこには慧音が立っていた。
彼女は上白沢　慧音。彼女も幻想郷の住人で、妹紅との同居人である。幻想郷でも寺子屋で教師をしているが、一応のこちらでの住人の監視を理由に教師をしている
「あ、慧音おはよう」
「藤原さん、学校では上白沢先生です」
敬語なのは教師としてのけじめらしい。

「さて今日からFクラスの担任になる（黒板に名前を書こうとする）…上白沢慧音です」
「なぁ、明久慧音どうしたんだ？」
「さっき黒板見たときチョークがなかった…」
「この学園ホントに勉強させる気あるのかしら…」
ちなみに席は、妹紅が前で、幽香が後ろである。あ、慧音がチョークを取りに行った…
「うおぉぉぉ！！すげぇ美人だ！！」
「不思議な帽子をかぶってるが、逆に美人度が増してる！！」
戻ってきたみたいだね…（頬に血が付いてるようにも見えたけど気のせいのはずだ…）
「えっと、何かありますか？」
「付き合ってください！！」
「「「「異端者には、死を！」」」」
「すいませんでした！！！」

「「ばかばっかね」」
「…ハァ」

「とりあえず、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」
その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。
「あと言っておくが、わしは男じゃ」
「「「「な、なんだと！？」」」」
みんな失礼だよね…（明久は男として認識しています）

「……土屋康太」
次に自己紹介したのは小柄な体の少年、土屋康太だ。彼はあるあだ名を持っているがまあいいだろう。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、
「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味はー」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、
「吉井明久を殴る事です♪」

『シュッ！』（幽香がペンを投げた音）
『ガツン！！！』（慧音がチョークで相さ…はじいた音）
「え…？」
呆然とする島田さん

「風見さん、ペンは投げないように」
「考えとくわ」
「幽香…」
「…わかったわよ…」
僕が非難がましく名前を呼ぶとむすくれながらも了承した（妹紅に関しては投げる前に止めた）
「島田さんもそのような発言は控えるようにしてくださいね（ニコッ」
「は、ハイ…（あの二人…吉井とどういう関係かしら…）」
島田さん、妹紅と幽香を恨めしそうに見てるがどうしたんだろう…
「あいつには気をつけなきゃだよな」
「そうね…」
「どうしたの？二人とも」
「「気にするな（気にしないで）」」
2人はそれぞれ笑顔で言った。

「・・・・・です、よろしく」
次は妹紅だな
「藤原妹紅です、男子制服を着ているが女なんであしからず」
「なるほど木下みたいなものか」
「じゃから、わしは男じゃ！！」
うん…もう突っ込むまい…
「あと、後ろにいる明久とは幼馴染です」
「「「「異端者には、死…」」」」
「明久に手出したら…」

『バギャンッッッ！！！』（ちゃぶ台が砕け散る音）

「こうなるからよろしく」
「「「「ＹＥＳ　ｓｉｒ！」」」」
「も、妹紅…」
「だって明久に…」
「それもだけどちゃぶ台…」
僕らの前には砕け散った妹紅のちゃぶ台…
「…」
「…」
「明久、ちゃぶ台一緒に使わせて…」
「別にいいけど…」
おっと次は僕か…う～んこの微妙な空気どうしよう…仕方ない…
「ーコホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね♪」
…ボケよう

次の瞬間、

「「「ダァァーーリィーーン！！。」」」

野太い男の大合唱。
「（言えるわけないだろう／／／／）」
「（明久ってそう呼ばれるのが好きなのかしら？）」
「（何言ってるんだ、あいつは／／／／）」
やばい、吐き気が…空気を変えるためとはいえやるんじゃなかった…しかし妹紅と幽香と慧音はなんで顔赤いんだろう？
「？？？？？？？？失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお願いします。」

さぁ気を取り直して次は幽香だね
「風見幽香よ。好きなものは花、嫌いなものは花をいじめるものよ」

ふう、普通だ…
「あと、明久の幼馴染でもあるわ」
すっごい笑顔で言い放った…やっぱりこの人Sだ…僕が困るところをそんなに見たいのか・・・？
「くそう、なんで吉井ばかり・・・」
「あんな不細工が…」
うわ～みんなひどいや…精神的ダメージがやばい…
「あと、明久に手を出したら…」
？やばっ！？

『ゴウッ！！！』（幽香がちゃぶ台に腕を振りぬく音）
『バシッ！！！』（幽香の手をあわてて明久が止めた音）
「どうしたの？」
「幽香、ちゃぶ台が壊れるからストップ…（手がジンジンする…でも手加減してたみたいだね…）」
「…仕方ないわね…「あの、遅れて、すいま、せん。」…」
「「「え？。」」」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

第3話　自己紹介と粉砕されるちゃぶ台（後書き）

さて机が二つ犠牲になるところでした。
慧音の頬の血は気のせいさ…（ハハハ
ちなみにチョークとペンは相殺で粉砕しました。

第４話　理由と試験戦争（前書き）

ＰＶ２０００っていったころにはもう３００００行きそうだ…

第４話　理由と試験戦争

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそうだろう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。
走ってきたのだろうか…息が少し荒い

「ちょうどよかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします？？？？？？」

小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持った少女、姫路瑞希はあわてて自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると１人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいるんですか？」

聞き方によっては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない
元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。
そんな彼女が学年最下位のＦクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだろう。

「そ、その？？？？？？？振り分け試験の時に高熱を出してしまいまして？？？？？？？」
やばい…あの時のことを思い出したら少しイライラしてきた…（プロローグ2参照
「明久…」
「大丈夫だよ妹紅ちょっとね…」
いけないいけない、心配掛けたら意味ないじゃないか…
すると先ほどの姫路さんの発言に

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」
「ああ、化学だろ？あれはむずかしかったな。」
「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力出し切れなくて。」
「黙れ一人っ子。」
「前の晩藤原さんが寝かせてくれなくて。」

「「「「異端者には…「昨日私は明久の家に泊まってたからあり得ないな」「ちょっ、妹紅！？」…チクショオオオオオオオオ！！！！！！！！」」」」
これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願いします！」
そう言うと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。
「き、緊張しました～～」
そう言って瑞希が卓袱台に突っ伏した。
「あのさ姫「姫路」・・・」
体調は大丈夫か声をかけようとしたらゴリラが声をかぶせてきやがった…
「は、はい。何ですか？え～と・・・・・」
「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」
「あ、姫路です。よろしくお願いします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。
「ところで体調もう大丈夫なの？」
「よ、吉井君！？」
声をかけた僕を見て姫路さんが驚いた…なんだろう…ちょっと悲しい…
「姫路。明久がブサイクですまん。」
「そ、そんな！目もパッチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！」
「そうね、女性に向かって蛆虫っていう奴よりははるかにかっこいいわね」
「うん、ゴリラよりは絶対かっこいいな」
「うぐっ・・・・ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういえば俺の知り合いにも明久に興味を持ってる奴がいたな。」
「それって誰ですか！？」
雄二が言うと嫌な予感しかしないな…
「確か久保ーー」
「久保？」
「利光だったかなあ。」

久保利光ー♂（性別　オス）

…うん、だろうと思ったよ…
「…（ホッ」
「ゴリラ…」
「え？…」
「「覚悟はできてるか（わよね）？」」
「ちょっ！？」

「ほらそこ、静かにしなさい」
「あ、すいませ…」

『バキッ、パラパラ…』（教卓が残骸となった）

「…ちょっと、替え持ってきますね（あの学園長どうシメテくれようか…）」
「あ、手伝いましょうか？」
「いえ、大丈夫ですよ吉井君。教室で待っててください」
さすがにこの環境は姫路さんにも悪いし、いくら頑丈とはいえ妹紅達の体にも悪いな…
「・・・・雄二、ちょっといい？」
「ん？なんだ？」
暇になったからか欠伸をしている雄二に声をかける。
「ここじゃ話しにくいから、廊下で。」
「別に構わんが。」

「で、明久何の用だ？」
「雄二この教室の設備なんだけど。」
「ああ、想像以上に酷いもんだな。」
「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」
「・・・・・何が目的だ。」
雄二が警戒するように目を細めてこちらを見る
「何がって、姫路さんと妹紅達のためだよ」
「……」
「あの教室じゃ体調崩すのは目に見えてるからね」

「お前…本当に明久か？」
「それどういう意味さ！？」
「まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Ａクラス相手に試召戦争をやろうと思ってた所だ。」
「え、どうして？」
「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」
「？？？」
「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

「ではクラス代表の坂本君、最後にお願いします」
雄二の番になり、雄二は教卓に上がった。目立ちたがりだね～雄二
「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ」
「じゃあゴリラで」
妹紅…
「所で皆に一つ聞きたい。」
そう言うと雄二は視線を巡らせた。
かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Ａクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・・・不満はないか？」

「「「「大ありじゃぁっ！！！！！」」」」

Ｆクラス魂の叫びである。ちょっと耳が痛い…

「だろう?俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・・Ｆクラスは Ａクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。

でも何だろう…すごく不安に感じる…

第４話　理由と試験戦争（後書き）

おまけ
「明久、ゴリラと何話してたんだ？」
「うん？あ～試験召喚戦争についてね」
「あら、楽しそうねそれ」
「うん、特にこんなクラスじゃ、妹紅と幽香が体調崩さないか心配なんだよ」
「「／／／／／／／」」
「？」

第５話　戦力と観察処分者（前書き）

・・・・・・・・・・・・・・（ゴシゴシゴシゴシ）・・・・・・・・・

・・

ＰＶ５０００超え・・・だ・・・と・・・？

第5話　戦力と観察処分者

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う！！」
壇上で自己紹介をしていた雄二のいきなりの提案。だが、いきなり言われても現実味のない提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。
「勝てるわけがない！」
「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」
「姫路さんが居たら何もいらない。」
「もこたん付き合って」
「断る」
「ゆうかりん罵ってください」
「……シニタイノカシラ？」
「うおおおおおおおおお！！！！！」
何だろう、カオスだ…
試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が行うテストの成績によって試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦争を行う。相手のクラスの代表を討ち取ったクラスが勝者だ。
試験召喚獣は戦争中の道具と思ってくれていい。
しかし雄二の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。
片や2学年の成績が悪かった人たちが集まったFクラス。
片や2学年の成績上位の人たちが集まったAクラス。
戦力の差は明白だった。
「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる！」
しかし雄二は非難の嵐を撥ね退けるかのごとく言い放った。提案した僕が言うのもなんだけど、何か根拠があるのだろうか？
「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃っているからな。今からそれを説明してやる！」
そうゆうと雄二は少し間をおいて、ある一カ所を見た。
「土屋。畳に顔をつけて姫路と風見のスカートを覗こうとしてない

でこっちに来い」
「……！！（ブンブン）」
「は、はわっ！？」
「あらあら…」
「ゆ、幽香？…」
「？どうしたの明久？覗かれてないわよ？」
「……くっ」
「いや、よく手を出さなかったな～って…」
「…すぐに切れてると迷惑かけるもの…」
「そうか…」
まあ話は戻してっと、土屋は畳の跡を隠しながら雄二の元へと行く。
「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」
「……！！」
雄二の発言に、クラスのどよめきが走る。
彼は土屋康太という名前では別段有名ではない。だが、ムッツリーニとなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の対象として挙げられている。
「ム、ムッツリーニだと！？」
「馬鹿な、奴がそうだというのか！？」
「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ…」
「あぁ。ムッツリの名に恥じない姿だ…」
「……」
まぁ男の子として仕方ないけど、盗撮とかはやめてほしいと思うよ…友人として
「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだって、その力は知っているはずだ」
「えっ？　わっ、私ですかっ！？」
「あぁ、主戦力だ。期待している。」
姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだった！」
「彼女なら、Ａクラスにも引けをとらない」
「あぁ、彼女がいれば何もいらない」
「あと風見幽香もＡクラス並みの点数点数保持者だ」
「そうだ！！幽香様がいた！！」
「ゆうかりいいいいいいん！！！」
「明久…ねえあれヤッテイイ？」
「…ダメだからね？」
「藤原妹紅に関しても、古典、歴史関係はＡクラス並みだ」
「「「「もこた～～～ん！！」」」」
「幽香の気持ちわかるかも…」
「アハハハ…」
「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」
Ａクラスの優子さんという双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。そして、雄二は…？
「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」
「それじゃあ、実力はＡクラスレベルが４人もいるって事かよ？もしかしたら、やれるんじゃないか？」
「あぁ、なんかやれそうな気がしてきた！」
やっぱ雄二は人をまとめるのがうまいな…こういうとこは悪友として認めてるんだけど…
「それに吉井明久もいる！」
その瞬間、クラスの時間が一時停止した。やっぱり余計なひと言があるね…
静まりかえる教室…なんで僕の名前を言うかなぁ。
「誰だ？　吉井明久って？」
「知らねぇよ。」
雄二の発言に上がりかけた士気が一気に下落する。まわりのクラスメイトはざわつき始めた。
「そうか、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、

学園史上初の観察処分者だ。」
雄二は僕を指さして言わなくてもいいことまで言った。雄二の奴・・・
「・・・・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」
まぁ、普通そういう評価だよね…
「あぁ、学年１のバカの屑だ」
そこまで言うかこのゴリラ…
「ほう…ゴリラ…そんなに燃やされたいのか？」
「そうね…肉片にして花の肥やしにしようかしら…でも花がかわいそうね…」
「し、しかし明久は教師の許可をもらって俺たちより召喚獣扱ってる分操作技術だけなら学年１だ」
「それってすごいのか？」
「あぁ、盾くらいにはできる」
妹紅と幽香を止めてるのをいいことにひどい言いようだな…
「これだけの有名人が揃っているんだ。お前ら、勝って当然だろ？」
「そうだ！　これだけの人物がいるんだ！　絶対勝てる！」
「もしかしたら打倒Ａクラスも夢じゃない！」
「そうだ！　俺たちに必要なのは座布団じゃない！　リクライニングシートだ！」
まずは俺たちの力の証明としてＤクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ！？」
「「当然だ！！」」
「ならば全員筆を執れ！　出陣の準備だ！！」
「「おぉぉぉぉぉっ！！」」
「俺たちに必要なのは、卓袱台じゃない！　Ａクラスのシステムデスクだ！！」
「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」」
「お、おー・・・・・・」
雰囲気に押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を

挙げる。
何だろう…僕には不安しかないよ…

第５話　戦力と観察処分者（後書き）

話のスピードが遅いな…
ここでの設定ですが、観察処分者のフィードバックは２０％くらいとします。
思いつき次第次話を投稿します。

第６話　宣戦布告とＵＳＣ（前書き）

幽香様降臨

第6話　宣戦布告とＵＳＣ

「明久にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」
「待った雄二。下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね。そんな危険な役はごめん被るよ、僕は」
予想的中か…
「大丈夫だ、騙されたと思って行ってみろ。俺は友人を騙すような事はしない。」
「いや、よく騙すでしょ？」
「…じゃあ私が行こうか？」
「まて藤原、お前が行ったら…」
「だって危険はないんだろ？それなら問題ないじゃないか」
「そ、それは…」
はぁ、いくら嘘だってわかってても妹紅をそんなとこに行かせたくないしな…
「わかったよ…じゃあ僕が行ってくるよ」
僕は宣戦布告の為に教室を出た。さっさとすませよう。

ｓｉｄｅ妹紅
「さすが明久だな。簡単に騙されやがる」
ゴリラがクククと笑ってやがる…やっぱり…
「やはりそんな魂胆じゃったのか、雄二よ」
「それ以外何があるんだ、秀吉」
ため息をはきながら木下はゴリラに言った。やっぱりこいつ燃やすべきかな…でも
「だったら残念だったな、ゴリラ」

「？　何がだ。あとその呼び方はやめろ」
「だって幽香がついていったからな」
「？どういう意味だ？」
まぁ、明久もいるしそこまでしないだろう。

ｓｉｄｅ明久

さてＤクラス前に到着した…
「待ちなさい、明久」
「あれ？幽香どうしたの？」
「私も行くわ」
本当は断りたいところだけど、まぁ危険になったら庇えばいいか…
「失礼します」
「？誰、君」
ちょうどいいや
「ごめんだけど代表呼んでもらえるかな？」
「いいわよ、平賀君」
「？なんだい」
「あ、えっとＤクラスの代表ですか？」
「そうだけど…」
代表が疑わしい目でこっちを見てくる…さっさと言って帰ろう…
「えっとＦクラスはＤクラスに対して宣戦布告します」
「え？」
そりゃ驚くよね…
「おいお前ふざけてんのか？」
Ｄクラスの男子だろう…いきなりこちらを睨んできた。
それに従って複数人立ち上がってるし…ハァ…
「てかさ、こいつって確か観察処分者じゃね？」
『ピクッ』
「あ～あのバカの代名詞の？」

『ピクピクッ』
「そうそう、人間の屑の代表」
『ブチッ』
あっ…
「じゃあかたずけても問題な「ねぇ、貴方達…」なんだ？」
「代表と明久の話だから首を突っ込まないようしてたけど、貴方達常識ないの？」
ダメだ…笑顔なんだけど目が笑ってない…
「ましてや、さっきから聞いてれば明久の侮辱ばっかり…」
「お、お前何言って「私ね、自分のものが侮辱されるのはとっても我慢ならないの」「えっ、僕ってものなの？」えっ、え？」
「ということで…いい声で鳴いてね♪」
「ちょっ、ま…」

side妹紅

ぎゃあああああああああ…！！！！
「「「「！？」」」」
ものすごい悲鳴のするなか、私は落ち着いていた。
「やっぱりか…」
「…どういうことだ？」
「あいつはな自分のものに手を出されるのが大嫌いなんだ。おまけに…」
「おまけに？」
「USC（アルティメットサディスティッククリーチャー）、あいつの通称だ」
「え？だが学園ではそんな…」

「基本明久が押さえてたからな…だが堪忍袋も切れたんだろう、おもにお前が原因で」
「…」
雄二としてはさっきの悲鳴は明久のものであってほしいと思ったんだろう…
するとドアが開いて…
「お、下ろしなさい／／／／／」
「下ろしたらまた暴れるでしょ？」
明久が幽香をお姫様だっこして現れた……いいな…

side明久

ふう…なんとか被害を抑えることができた…
「大丈夫か？明久」
「うん、まぁ幽香が暴れたので助かったよ…止めるのに時間かかったけど」
「吉井～」
島田さんがなんか腕を掴んでくる…てか、かなり痛い！！！！！
「ちょっとさっきのどういうことか聞きた「「それより前に放せ（放しなさい）」」わ、わかったから首掴まないで…」
「大丈夫か？明久よ」
「秀吉…うん大丈夫だよ」
なんか向こうでいざこざが起こってるけど無視だ…
「それより坂本君、貴方…」
「よーし！　ミーティングするから島田に土屋、姫路にお前ら、屋上に行くぞ！」
あ、逃げた。まぁ、あの状態の幽香を相手にしたくないのはわかる…
はぁ、先が思いやられる…

第６話　宣戦布告とＵＳＣ（後書き）

さて書き忘れてましたが慧音は職員室に戻っています、授業の用意で。

「ほう…忘れるとはいい度胸だな…」

え？慧音さん…角が…てかなんで襟首を…

「教育的指導だ！！！」

いやあああああああああああああ！！！！！！！！！！

第7話　ミーティング（前書き）

後書きで投票があるのでよろしくです。
あ、あと妹紅の男口調とかですが、一応キャラがわかりやすいよう
書くためにそうしています。原作では妹紅って女口調なんですよね～
あと、明久は東方キャラに対しては基本呼び捨てです。

第7話　ミーティング

「……（サスサス）」
「ムッツリーニ。覗いてた時の畳の跡ならもう消えてるよ？」
「……！！（ブンブン）」
「いや、今さら否定されてもムッツリーニがＨなのは皆知ってるから」
「……！！（ブンブン）」
「ここまでバレてるのに否定し続けるなんてある意味凄いと思う」
「……！！（ブンブン）」
「――何色だった？」
「姫路が水色、風見が…見えなかった（クッ」
「いやそこまですらすら言えてる時点で…」
「？私のがどうしたの？（ニコッ」
「……次こそは…」
「明久じゃないと無理よ」
「え？」
ナニヲイイダスンダコノヒトハ…
「だって明久、お風呂一緒に入ったことあるじゃない（ニヤニヤ」
…うん…ＵＳＣですねわかりますｏｒｚ
「何…だと…？」
「いやｔ「吉井、どうい「はいはい話は最後まで聞こうね」ちょっはな…」…」
「まぁ小さい頃の話だし、それ言ったら私だってあるしね。露天街あるし」
妹紅…それ庇えてない…
「皆の衆ここはどこだ？」
「「「「審判の法廷」」」」
「男とは！！」

「「「「！『愛』を捨て『哀』に生きる者成りッ！」」」」
「これより審判を行う」
「ハイ、被告人吉井明久は風見幽香とお風呂に…」
「簡潔にのべたまえ」
「実にうらやましいであります！！」
『『『『我等異端審問会の血の盟約の下、異端者に死をッ！！死をッ！！』』』』
うわ…変な黒い集団が…ゴキ○○を思い浮かべてしまった…
「とりあえず、しになさい」
「とりあえず消えろ」
「「「「ぎゃあああああ！！！！」」」」

屋上に出ると、雲一つ無い空から眩しい光が差し込んでくる…
ムッツリーニ…努力はいいけど…スカートの中を覗こうと頑張るのはどうかと…

「さてと。明久、宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろし、僕達も各々その辺に座る。
「うん、一応今日の午後に開戦予定と告げてきた」
「それじゃ、先にお昼ご飯って事ね？」
「そうなるな。だからしっかりと腹ごしらえしとけよ」
「明久、はいこれ」
幽香が僕の弁当を渡してきた。あれ？なんで…
「台の上に忘れてたわよ？」
「あ、そうかありがとう。危うく飯抜きになるとこだったよ」

「あの…」
「どうかしたか？」
「いや、風見さんと藤原さんのお弁当の中身が似てるんですけど…」
「「そりゃ、明久が作ったからね（からよ）」」
「まぁ、たまに作ってもらったりしてるしね」
「そうですか…」
あれ…何だろう、気のせいかな？今一瞬、姫路さんの方からドス黒いオーラを感じたんだけど…。

「で、どーゆー事なのよ吉井？」
「あの、島田さん。何故質問しながら僕の腕を極めようとするのかな？」
「いいからさっさと質問に―――待って藤原さん、ウチの首は１８０度曲がったりしないから勘弁して欲しいんですけど…」
「だったら、とっととその殺気を引っ込めて腕を放してもらおうか？」
「つーか明久お前料理なんてできたのか？」
「それってどういう意味さ」
「お前去年、飯食ってなかったじゃねえか」
「一時期、昼飯を水と塩で乗りきってた事もあったしのう」
「……舌が肥えてるとは思えない」
「そうね。絶対にあり得ないわね」
うわ…ひどい言われようだ…まぁ事実そんな時期もあったけど…とりあえずその時の慧音と永林の説教はきつかったと記そう・・・（ガクガク
「すごくおいしいわよ？」
「そうだな、私達もよく味見たのんでるし」
なんか褒められると、少し恥ずかしいな…
「あの、吉井君」
「ん？」

そんな中、さっきまで考え事をしてた姫路さんが口を開く
「宜しければ私のお弁当も食べてくれませんか？」
「え、どうして？」
「是非吉井君に味見をしてもらいたいんです」
「いつ？」
「明日のお昼で良ければ」
「う～ん、まあいいけど」
問題はないかな？
「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井『だけ』に作ってくるなんて」
「あ、いえ！その、皆さんにも…」
「俺達にも？いいのか？」
「はい。嫌じゃなかったら」
「おお、それは楽しみじゃのう」
「……（コクコク）」
「……お手並み拝見ね」
僕は小物系作ってくるかな…

「さて、明日の楽しみが出来た所で、話を戻そうか」
あ、そーいえば試召戦争のミーティングやってたんだった。すっかり忘れてた。
「雄二よ。一つ気になっていたんじゃが、何故Dクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」
「そういえば、確かにそうですね」
「坂本君の事だから、何か考えがあっての事だと思うけど」
「まぁな。理由は色々あるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」
「え？でも僕達よりはクラスが上だよ？」

「確かに、振り分け試験の時点では向こうの方が強かったかもしれないな。けど実際の所は違う。周りにいる面子をよく見てみろ」
えーっと……
「うん。幼馴染みが二人と美少女が一人、親友が一人にバカが二人にムッツリが一人いるね」
どれが誰かは言わなくてもわかるだろう…
「誰が美ｓゲフッ」『ドゴッ』
「で、それがどうしたのかしら（ニコッ」
何か言おうとした雄二を妹紅が殴り、幽香が話をそくした。

「ま、要するにだ。姫路に問題の無い今、正面からやり合ってもＥクラスには勝てる。Ａクラスが目的である以上はＥクラスなんかと戦っても意味が無いって事だ」
「？、それじゃあＤクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」
「ああ。確実に勝てるとは言えないな」
一応ちゃんと考えてたのか…
「まぁこれも打倒Ａクラスへの必要なプロセスだからな問題ない」
内容が気になる所だけど、今は戦争に集中しなきゃいけないからね。
ま、その時が来たら解るか。
「あ、あの！」
？どうしたのかな？
「ん？どうした姫路」
「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」
「ああ、それか。それはついさっき明久に相談されて「それはそうと！」」
雄二は何言うかわからんから発言させるか！！
「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」
「心配いらん。負ける訳ないさ。お前達が俺に協力してくれるなら、どこが相手だろうと必ず勝てる」

「いいか、お前達。ウチのクラスは――――最強だ」

聞いた限りかっこいいんだけど、心配ごとしかないのはなんでだろう…

第7話　ミーティング（後書き）

閻魔さまこと映姫に関してですが外見案で
１幼女
２明久と同じくらいの少女
３お姉さま
結果は決まり次第お伝えします

第8話　Dクラス戦1（前書き）

ＰＶ１万突破…突破記念短編考えなきゃ

第8話　Dクラス戦1

side幽香

ついに始まったわねDクラス戦…
私は今Fクラスにいる。戦線に出ないのかって？明久から謹慎処分喰らってるのよ、仕方ないじゃない…
「・・・・・・今前線部隊と敵が衝突中」
「状況は？」
「・・・・・・今のところ互角」
Fクラスの一応リーダーである坂本は土屋から状況報告を受けている…しかし彼どうやって状況を調べてるのかしら…監視カメラや盗聴器は破壊したはずなんだけど…
「そういや風見」
「何かしら？」
「お前、補給テストは…」
「ある程度だけど受けてるわ」
「…いつの間にだ？」
「途中退席をした次の日よ。あぁ、明久と妹紅も受けてるから問題ないわ」
まさか次の日に慧音と永林がテストを受けさせてくれるとは思わなかったわ…
どうも永林はそれについて慧音に連絡したみたいだけどね（プロローグ2参照
しかし暇ね…戦線に出たいけど謹慎喰らってるし…明久から喰らってるから破れないし…よし、日曜日の弾幕勝負で勝ったら明久に何頼むか考えよう…ふふ、そう考えると時間が足りないように思えるわ…

ｓｉｄｅ明久

どうもこの小説の主人公こと明久です。え？出だしいがおかしいって？ＨＡＨＡＨＡ何を言ってるのさ

「明久、お願いだから現実に戻ってきて」

「ハイ」

ただ今の現状

『さぁ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌だぁっ！！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんな事はしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『それは教育じゃなくて洗脳…だ、誰か、助…イヤァァァ（バタン、ガチャ）』

やばいすごく逃げ出したい…

「ところでテストやっぱり適当に受けたの？」

「妹紅口調昔みたいになってる。周りにとって僕は『勉強のできない観察処分者』だからね。」

「誰も聞いてないから問題ないわよ…でもどうするの？」

「やるしかないでしょ、ちょうど古文だしいくよ！妹紅」

「…はぁ、わかったわよ…いくぜ、明久！！」

「Ｆクラス吉井明久と」

「藤原妹紅！」
「「ここにいるＤクラス全員に対して、勝負を申し込む！！試験召喚獣召喚！！！！」」
僕達が手を合わせるようにあげると足元から、魔法陣というべきだろうか…幾何学模様の図形が現れ、その後召喚獣が姿を現した。
僕の召喚獣は改造学ランに木刀を持った犬耳に尻尾がついたデザイン、妹紅が、ワイシャツにもんぺを穿き（早い話元の妹紅の格好）、白猫の耳としっぽがついたようなデザインだ。
「いくよ！」
「いくぞ！」
「たかだかＦクラス二人だ。一瞬でつぶすぞ！！」
「ましてや一人は観察処分者！！」

古文
Ｆクラス　吉井明久　６２点
Ｆクラス　藤原妹紅　３１７点
ＶＳ
Ｄクラス　モブｘ１０人　平均１０１点

「「「「な、何だあの点数！！？？」」」」
「ちぇ、やっぱちゃんとできなかったから４００点行かなかったや」
「でも高得点には変わりないよ」
「ひ、ひるむな！！数でつぶすぞ！！」
「「「「お、おう！！！」」」」
「そんなに甘くないっての」
妹紅はてのひらから火を出し、それをばらまいた…
「「「「ぎゃあああああ！！！！」」」」
Ｄクラス４名　０点　戦死
やっぱすごいな…おっと
「妹紅危ないよっと」

僕は妹紅の後ろから襲おうとした二人に対して足を引っ掛け、一人は首、一人は心臓付近を切りつけた
Dクラス2名　0点　戦死
「「え・・・なんで？」」
どうも召喚獣も人と同じようで人体急所を攻撃すると差がひどくない限りは一撃で倒せるみたいだ…
同じ要領であと4人を倒し「「「「戦闘描写すらなしかよ！！」」」」…ハイハイ鉄人お願いしますね～「「「「いやあああああああ！！！」」」」前線部隊はまだ先みたいだしな…よし、
「妹紅…」
「なんだ？」
「前線部隊のところまで行く間にどっちが多く倒せるか勝負しない？」
「お、それ楽しそうだな。じゃあ私が勝ったら今日の晩飯慧音と一緒に食おうぜ」
「？いつものことじゃ…「いいんだよ」そう、じゃあ…」
「くそ、こいつらなめてんのか？」
「妹紅…」
「おう」
「ゲームスタートだ！！」

なんか、弾幕勝負を思い出すな…
あ、日曜幽香に弾幕勝負挑まれたの思い出しちゃった…ｏｒｚ

第8話　Dクラス戦1（後書き）

フラグ（いろんな意味で）回収っとちょっとですが、明久のことが出ましたね～

明「まだ内緒ごとはあるんだけど後に書くんでしょ？」

書けるかな・・・（遠い目

明「ちょっと！？」

ＰＶ１万記念短編　向日葵の記憶（前書き）

３日目で１４０００越えって…
題名から誰のことかわかるかもしれませんがどうぞ

ＰＶ１万記念短編　向日葵の記憶

それはホントに偶然だったのかもしれない……でも私は後悔していない…

それはホントにただの気まぐれだった…

「さて水をあげに行こうかしらね」
私はいつものように向日葵畑に出た。
「あら？」
するとそこには５、６歳くらいだろうか、茶髪の少年が空いた場所に座り込んでいた…
いつもなら追い返すけど、今日はなんだか気分がいいし…話しかけてみようかしら…
「あら？人間の子供がなんのようかしら？」
「え…」
いきなり声をかけられたことに驚いたのだろう…その子はびっくりしたように振り返った…
「…」
見ようによってはかわいらしい顔立ちだろうか…しかしそれよりも私が見入ったのは…その瞳だった。
濃いめの茶色…どこにでもいそうな色だったが、
深かった…まるで吸い込まれるような…すべてを見透かされるような…そんな瞳をしていた…
私はそれに見惚れ、そして恐怖した…
こんな子供が…ここまで深い思いを瞳にうつせるものなのだろうか…

「お姉さん誰？」
…いけない…思考にふけるとこだったわ…
「名前を聞く場合、自分から言うのが礼儀ってものよ？」
「あ、それもそうか…ぼくは吉井明久っていうんだ」
「明久ね…私は風見幽香よ」
「へ～」
どうも名前を知らないみたいだし…外来人かしら…
「明久、気をつけたほうがいいわよ？」
「何を？」
とりあえず…
「ここにはね…とっても怖い妖怪が現れるのよ」
「じゃあ、ここを出なきゃかな…」
「そうね…だから早く…「こんなところで妖怪現れたらはお花がかわいそうだもんね」え？」
この子なんて…
「前ね、蜘蛛の妖怪に襲われたんだけどすごくでかくてね、あんなのが現れたらお花さん倒れちゃうよ」
聞き間違いじゃないか…しかしこの子はバカなのだろうか…自分のことより花を心配するなんて…
でも…
「じゃあ、またねおｎ「まちなさい」？」
「私の家すぐ近くだし、お菓子食べに来る？」
「え…でも」
「大丈夫よ、妖怪が来ても私が追い払うし（まぁ、自分のことなんだけどね）」
「う～ん、じゃあ行こうかな」
笑顔で喜ぶ明久…ふふ、まぁ、いい暇つぶしにはなるでしょうね…
それからも明久はちょくちょくとここの遊びに来るようになった…
そして、いつの間にか私も明久が来ないかと楽しみになっていた…

でも、ある意味予想できて、起こってほしくなかったことが起きた…

「新しい妖怪が幻想入りした？」

そうそれは明久と会って数カ月たった時、八雲紫の一言が始まりだった…

「そうなんだけど、どうもこの妖怪ね、人の話を全く聞かないのよ…」

「なんでそんなのを…」

「まぁ、そんなんだから気をつけてね～」

あ、逃げた…

昼頃・・・

早く行かないと…今日は明久が向日葵畑で待ってるんだった…

その時、私は気づいてしまった…向日葵畑に感じたことがない妖力を感じることに・・・

（まさか！！朝紫が言っていた妖怪！？急がなきゃ！！）

そこに着くと、明久とあれは…鬼？でもなんか違うような…

「コドモ、ウマソウナコドモ。」

その鬼？はまるで踊るかのようにはしゃいでいた…あ…

「な、やめろ！！花が傷つくじゃないか！！」

「ハナ？コレ？ジャマクサイナ…」

その妖怪は向日葵をまるでごみをのけるかのごとく、棒でなぎ払った…

あの妖怪…コロス…

私は、あのごみを消すために傘を構えようとした…

「…やめろ…」

『ゾワッ』

「「！？」」
な、まさか私が一瞬死を覚悟するなんて…何！？
「この花達は幽香が毎日頑張って育てたものなんだ。それに気安く触れるな！！」
「・・・・・・」
明久の茶色だった瞳は、青く、蒼く…あわく虹色に輝いていた…周りを包むような殺気。でも矛盾して周りを守るように包み込む優しい雰囲気…
あぁ、そうか…
「フ、フザケルナアアアア！！」
妖怪は明久に恐怖したことが許せなかったのか、明久に飛びかかった…
『ガツンッ』
「なっ！？」
しかし…棒を振り下ろすもそれは…私の傘によって止められていた…
「ナ、ナンデオマエモヨウカイナノニ…」
「えぇ、確かにそうね…でもあなたは私の育てた花を傷つけた…」
私は…相手に向けて傘をつきつける…
「ましてや…私のモノに手を出したんだから…」
「覚悟はできてるわよね？」
「ヤ、ヤメ・・・」
「…消えなさい…」
「マスタースパーク…」
「あれ？」

「あら？起きたの？明久」
「えっと・・・なぜ僕は膝枕されてるのでございましょうか？」
時折この子の思考がわからないわね…
「貴方、私が来なかったらどうする気だったのかしら？」
「あ、そうか僕妖怪に襲われて…」
「ねぇ、明久…」
「なに？」
「これからも貴方は多分妖怪から襲われかけたりすると思うの」
「うん…」
「だから…逃げる手段として私が特訓してあげるわ…」
「えっ・・・」
ふふふ、なんか不思議な気分ね・・・
「ちなみに拒否権はないわ・・・明日の朝から始めるからちゃんと来なさいね？」
「・・・はいｏｒｚ」
ほんと明日から楽しみだわ。
思えば、この時…いや、明久を見つけた時から、私は明久だけを見ていたのかもしれない…

「…夢…みたいね」
はぁ、まさか明久と会ったころの夢を見るなんて…／／／／
でも、もうあの頃から明久は力に目覚める兆しがあったのよね…
今日は始業式だし、明久を起こしに行こうかな…
「おじゃまします。明久、起きなさ～い」
……
まだ寝てるみたいね…

私は明久の部屋の行こうとしたとき、リビングにある花に気づいた…
「…ふふ」
それは昔、明久にあげた花…あげた時から今まで植えかえしながら、
ちゃんと育てているらしい。
胡蝶蘭…清純、純粋という花言葉を持つ花…
でも、明久のことだからもう一つの意味には気づいていないだろう
…この花をあげた本当の意味に・・・
もう一つの花ことば、それは…

あなたを愛してます

ＰＶ１万記念短編　向日葵の記憶（後書き）

どうでしたでしょうか…
ちなみに時期的には第１話の直前です。
ちなみに向日葵の花ことばには「私の目はあなただけを見つめる」
というのもあるそうです

第9話　Dクラス戦2（前書き）

とうとう彼女が…うまく書けるかな…

第9話　Dクラス戦2

明久と妹紅が勝負をしている頃前線部隊では、

「さすがに押されてきたわね…」

「そうじゃのう…仕方ない…みな、助けが来るまでなんとか耐え凌ぐのじゃ！！」

「「「「イエッサ！！」」」」

美波と秀吉が指揮をとり何とか耐え凌いでいた…

「あ、そこにいるのはもしや美波お姉さま！五十嵐先先生、こっちに来てください！」

戦場に響き渡る声に、美波は顔色を青くする。

「くっ！ぬかったわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「お姉さま…私はお姉さまから捨てられた日から何が悪いのか考えたんです。そしてわかりました、お姉さま私はお姉さまだけを愛しているということを！！」

「美春…だから言ってるでしょ！！ウチは普通に男が好きなんだって！！」

「いえ、お姉さまも美春のことを愛してるはずです。ただ美春がお姉さまだけを愛さなかったから美春を捨てたのでしょう。だからここで言います、美春はお姉さまだけを愛してます」

「人の話を聞いてないでしょ！？あんた」

「…なんじゃろうか…帰ってもよいか？」

「き、木下！！手伝いなさい！！」

「はあ・・・しかたな「殺します…邪魔するものは殺します…」本気で帰ってはだめか？」

「き、木下～！？」

「では、お姉さま行きます！！試験召喚獣召喚」

「あ～もう、試験召喚獣召喚」

科学

Ｆクラス　島田美波　５２点

ＶＳ

Ｄクラス　清水美春　７８点

このままではやられてしまう。そしたら補習室に・・・・・・

「い、いや！　補習室は嫌っ！」

このまま戦えば訪れるだろう未来に焦りを感じ、美波の召喚獣の攻撃が単調になる。攻撃を先読みした美春が避けて一撃を与えた。

戦死した、と思った美波であったが

「え？」

島田美波　６点

点数が僅かに残った。どうしたのか困惑していると

「フッフッフ・・・・・・」

『ガシッ』

突然美春が美波の腕を掴み補習室とは違う方向に連れて行こうとしていた。

「ちょっと！　どこに連れて行こうとしているの！」

「どこに？　愚問ですわ、お姉様・・・・・・」

ゆっくりと美春が美波の方を向いて

「今なら保健室には誰もいません！　さぁお姉様！　美春と共に大人の階段を上りましょう！」

目を爛々に輝かせて言った。美波は顔から血の気が引いていくのが分かる。

「いやよ！　前から言っているけど、ウチは普通に“男”が好きなの！」

「大丈夫です、お姉様！　初体験は怖いかもしれませんが、美春が手取り足取り気持ちよくしてあげますわ！」

「い、いや！」

「無駄ですわ、お姉様。他の豚野郎どもはあの通り、豚同士で争っていますわ。助けなど来ません！」

美春の言うとおり、他のFクラスはDクラスの相手をしていて助けにいけない。秀吉もいつの間にか現れたDクラスの生徒に苦戦している。このままでは自分の貞操が危ない。でも、どうすればいいの

か。八方手詰まりだった。それでも誰か助けてくれると信じて美波は助けを求めた。

「た、助け…」

「さあ、美春と一緒に…「「邪魔だ！！！どけ～」」え？」

いきなり現れた召喚獣に切り裂かれ、ついでのごとく燃やされ美春の召喚獣は…

清水美春　０点　戦死

「な、何が起こったのですの？」

その先の戦場では、

「ははは、燃えろ！！」

「「「「ぎゃあああああ！！！！」」」」

「…斬る…」

「「「「うわあああああ！！！！」」」」

「戦死者はほしゅううう！！」

「「「「いやあああああ！！！！」」」」

明久と妹紅の召喚獣によってどんどん倒され、鉄人に補修室に運ばれるＤクラスの面々だった…

ｓｉｄｅ明久

とりあえずここにいた相手は全員倒したかな…

「よし、明久！！討伐数を確認するぞ！！」

もこた…妹紅…討伐数って…

「えっと僕は１７人かな…」
「…やったあああ！！勝った、１８人！！！」
「うん、おめでとう」
「明久、約束だからな！！」
「ふふ、わかってるよ」

妹紅たら子供のようにはしゃいでるや・・・

「明久、たすかったぞい」
「あ、秀吉。気にしないで」

気づいてなかったなんて言えない…

「よ、吉井…」
「し、島田さん？」
「とりあえず助かったわ」

そこには燃えつきかけた島田さんがいた…

第9話　Dクラス戦2（後書き）

なんていうか…突破短編で燃え尽きた…
ちなみにですが、短編のほうには明久の能力の一つが少しだけ出てます

第１０話　Ｄクラス戦ラスト　あとはよろしく（前書き）

私的ことですが・・・
空の境界は神作品だと思う！！！

第１０話　Ｄクラス戦ラスト　あとはよろしく

Ｄクラス付近

さすがに点もやばくなってきたな…

「明久、どうする？」
「僕たちはまだ問題ないけど、さすがにみんながやばいね…」
「おい、やばいぞ！！Ｄクラスの野郎船越先生を呼んできてやがる」
船越先生といえば数学・・・くっ、点数的にもうみんなやばくなってるはず

「須川君何とかして船越先生の進行を止めるんだ！！」
「了解」

これが成功するかしないかで現状も変わるはずだ！！

ｓｉｄｅ雄二

風見が手洗いに行っている間に暇だな～と思っていると須川が教室に入ってきた。

「坂本」
「？須川どうした？逃げてきたのか？」
「いや、吉井から船越先生のＤクラス行きを止めろ、と言われたんだがどうしたらいい？」

「そりゃ、放送で…」
そう言えんば…ククク、ちょうど風見もいないことだし、
「須川、・・・・・・・・・と放送で流せ（ニヤ」
「・・・了解だ（ニヤリ」
ククク明久がどんな目にあうか楽しみだ

雄二が死亡フラグを立てているころ

ｓｉｄｅ明久

『ピンポンパンポーン♪』
《連絡致します》

あ、なんか声変えてるけど須川君か？放送とは考えたね。

《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》

よしこれでみんなの補給テストの時間が作れ・・・

《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「・・・え・・・？」

船越先生
数学担任の４５歳独身

仕事にのめり込み過ぎて婚期を逃してしまい、遂には男子生徒達に単位を盾に交際を迫る様になったと噂の人・・・

「な、なんてこった・・・Fクラスの野郎ども勝ちにきてやがる・・・」

「くそ、自分の身を捨てるなんて、こんな奴らに俺たちは勝てるのか？」

なんかDクラスが言ってるけど無視だ！！ヤバイヤバイヤバイ！！！

《繰り返・・・『ドゴーンッ』なっ！！え、ちょ、やめ・・・・》

『ぎゃあああああああああああ！！！』

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

《・・・コホン、さっきの放送に訂正を入れるわ。船越先生、体育館裏に須川を置いておくから好きにしていいわよ》

（（（（須川お前のことは忘れない・・・））））

《あと・・・坂本雄二・・・クビヲアラッテマッテオキナサイ！！！》

あ、雄二終わったな…

「明久、私も行っていいかしら？（ニコッ」

「妹紅・・・ダメだよ・・・」

今は戦争に集中しよう・・・

「吉井！！」

「横田君？どうしたの？」

「（な、名前が出た～）Dクラスの代表の隊が、隙を見てFクラスに向かっているらしいぞ！！」

な、さっきに放送で見逃してしまったか！？

「みんな！！急いでFクラスに戻るよ！！」

「「「「了解！！」」」」

Fクラスに戻ると・・・・

「・・・・・・・・・・・・」

「チョット、マッテテモラエルカシラ？」

「「「「は、はい」」」」

すごい笑顔の幽香と、

ぼろぼろで虫の息の雄二と、

幽香の殺気おびえているDクラス代表の隊がいた…

「え、え～っと」
「あ、え、Fクラスの先行隊も戻ってきたみたいだが、さすがにこの人数に相手は無理だろう？」
あ、代表として何とか立て直したね。
「確かに僕たちじゃ無理だね」
「なら「だから、」ん？」
「「姫路さん、あとはよろしく」」
僕と妹紅がそう言うと
「あ、あの・・・」
平賀君（Dクラス代表）の後ろから、申し訳無さそうに姫路さんが肩を叩いた。
「え？あ、姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど…」
「い、いえ、そうじゃなくて…」
「？」
「え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願いします」
「あ、こちらこそ」
「その……Dクラス平賀君に現代文で勝負を申し込みます」
「はぁ…、どうも」
「あの、えっと……さ、試験召喚獣召喚です」
「え？あ、あれ？」

平賀君、驚いてて頭が追いついてないな・・・

現代文

Ｆクラス　姫路瑞希　３４５点

ＶＳ

Ｄクラス　平賀源二　１２８点

「ご、ごめんなさい！！」

姫路さんの召喚獣は平賀君の召喚獣を大剣であっさりと、斬ってしまった。

こうして、Ｆクラスの勝利は決定した。

第１０話　Ｄクラス戦ラスト　あとはよろしく（後書き）

ふう、なんとかここまで書けた・・・
あとは戦後対談だ
戦後対談には少し日常編を入れる予定です。

第１１話　Ｄクラス戦　戦後対談（前書き）

今のとこの優勢ですが

台詞の前には名前をつけない

映姫の外見は明久くらい

です。まだまだ投票は受け付けてるのでどうぞ。

第１１話　Ｄクラス戦　戦後対談

戦後対談したいんだけど…

「・・・・・・・・・」（ボロボロの雄二）

「フフフフフフフ・・・・・・」（目が狂気に染まってる幽香）

・・・これ、どうしよう・・・

「えっと・・・」

「あ、平賀君ちょっと待っててね」

「あ、あぁ」

さて、まずは・・・

「妹紅、幽香を止めるから雄二を起こして」

「・・・とどめさしちゃだめ？」

「今はいる人間だから普通に起こして」

「・・・わかった」

さてと・・・

少年少女作業中

Ｄクラス

「／／／／／／／／／／／／／／」（只今、明久に後ろから抱きかか

えるように抑えられている）
「（いいな・・・）」（その状況をうらやましそうに見ている）
「（はぁ、明久に奴は…）」（ＦＦＦ団を押さえながらもちょっとうらやましそうに見ている）
「ちょっ、ふ、藤原さん。あ、足ほどいて・・」（明久に尋問しようとしたとこを妹紅に四の字固めされている）
「「「「「・・・（呪呪呪呪呪）」」」」」（明久に襲いかかりたいが慧音がいるため出来ない）
「・・・」

うん、カオスだな～（お前が言うか！？ｂｙ作者）

「え、えっと・・・」
「あれは無視しろ・・・」（気絶していたところを、妹紅に思いっきり腹を蹴られて悶絶しながらも復活）
「あ、あぁ」
「じゃあ、対談と行こうか・・・」

でもよく雄二、幽香の攻撃に生き残れたな…やっぱり前より幽香、手加減うまくなったのかな？

「まさか姫路さんがＦクラスだったなんて・・・・・信じられん。」

気を取り直したように平賀君がつぶやいた。

「あ、その、さっきはすいません・・・・」

別の方向から瑞希が駆け寄っていって源二に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることは無い全てはＦクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

これで彼は今後最低３ヶ月は最低のＦクラス負けた、ということでクラスメイトに恨まれながら過ごす羽目になるが、

「いや、その必要はない。」

雄二はそう言い放った。

「何？」

「Ｄクラスの設備を奪うつもりは無いからだ。」

雄二の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもＡクラスだ。だからＤクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが・・・・いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

そう言って雄二が指差したのはＢクラスのエアコンの室外機だった。

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろうが悪い取引じゃないだろ？」

まあ、そうだろう。うまくやれば厳重注意だけですむのだから。
「分かった。その提案を呑もう。」
「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰っていいぞ。」
交渉は成立した。
「ああ。お前らがＡクラスに勝てるよう願っているよ。」
「はは、無理するな。勝てっこないと思ってるんだろ？」
「はは、そうだ。Ｆクラスが Ａクラスに勝てるわけがない。ま、社交辞令だ。」
そう言うと源二は去って行った。
「さて、みんな！今日はご苦労だった！明日は今日消費した点数の補充を行うから今日は帰ってゆっくりしてくれ！解散！」
その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻っていく。
「さ、帰ろうぜ明久」
「あ、うん。帰ろうか」
「そ／／／そうね／／／／」
僕たちは帰路につくのだった・・・
慧音&妹紅宅（正確には部屋かな？）
「ただいま」

「あ、慧音おかえり」
「ただいま、妹紅。うん？明久がいるのか？」
「あぁ、今ご飯作ってる」
「そうか、じゃあ着替えてくるかな」
「おう。私は手伝いしてくるよ」

リビング

「「「いただきます」」」

「今日は明久悲惨だったな・・・」

慧音の一言で今日の放送を思い出してしまった・・・

「慧音・・・それは言わないで。ホントにヤバいって思ったから・・・」
「あぁ・・・もうちょっと力こめとければよかった…」
いや・・・ダメでしょ・・・
「さすがに限度ってもんがあると思うぜ？あのゴリラのはふざけてるにしても度が過ぎる」
「（ふむ、原因は坂本か・・・）まぁ、船越先生には隣の草部さん（４９歳独身）を紹介しといたから大丈夫だろう・・・」
「・・・」
「ん？どうした？明久」
「あ、ありがとうけいね～～！！！」

『抱きッ』

「なっ、あ、明久／／／／／／」
「（いいな・・・）」
「うぅ・・・」
「・・・・・・もう・・・」（なでなで）
キングクリムゾン！！

「・・・ごめん取り乱しちゃって・・・」
や、やばい。つい安心から慧音に抱きついてしまった・・・
「まぁ、気にするな／／／／」
「そうそう。あれは仕方ないよ」
「うん・・・」

「明日は・・・・・・補充試験をやって終わりかな？」
ご飯も食べて二人でゲームしていると、妹紅がそんなことをつぶやいた
「うん、たしかそれだけじゃなかったかな？」
「だったよね」
「あ、そうだ。明久、妹紅、幽香にはもう伝えているが、明日の弁当は私が作るから楽しみにしていろ」
「やった」
「うん、楽しみに待ってるよ」

さて時間はっと・・・

「時間も時間だしそろそろ帰ろうな・・・」

「え、泊ってて構わないわよ」

やっぱ家だと口調も崩れるみたいだね・・・

「え、でも」

「ん？私もかまわないぞ」

慧音・・・先生としてそれはどうかと・・・

でもま・・・

「じゃあ泊っていこうかな？」

そのあと、妹紅と慧音とでゲームをしてリビングに布団を敷いて寝た・・・

ホント、なにか忘れているような・・・

第11話　Dクラス戦　戦後対談（後書き）

おまけ

朝・・・

「・・・・」（チラッ）

「・・・・・（スゥ・・・・」（右　慧音

「・・・・・う・ん・・・（スゥ・・・・」（左　妹紅

「・・・・どうしてこうなった・・・・」

第１２話　恐怖！大量殺戮科学兵器（前書き）

つ、ついにあれが…

第１２話　恐怖！大量殺戮科学兵器

慧音＆ａｍｐ；妹紅宅　　朝

何とか二人の拘束から抜け出した僕は、

「昨日は出来なかったからね…」

ベランダで座禅をしていた。

本当は身体を動かしたいけど…さすがに無理だからね、イメージトレーニングだけでも…

数時間後

「明久、ご飯食べよ」

「あれ、もうそんな時間？」

妹紅の声によって空想世界から現実に引き戻される。

「慧音は？」

「明久の邪魔しちゃ悪いからって声かけずに行ったよ」

「そう…まぁ、ご飯食べようか」

「うん」

その後、幽香を呼んで僕達は学校に向かった。

キングクリムゾン！！

お昼

なんか作者の陰謀を感じた…

「明久、行くぞ」

いけない、話を全く聞いてなかった…

「行くって、何処に？」

「吉井…あんた今日姫路さんから試食頼まれてるの忘れたの？」

「「「あ、あぁ」」」

「って、お前らもかよ」

「でもどうしようか、明久」

「そうよね…」

「ん？お前らどうかしたのか？」

『ガラッ』

「あ、藤原さん達、ちょうどよかった」

タイミングよく慧音がやって来た。

「はい、藤原さん、風見さん」

「「ありがとう」」

「なんだ、お前ら上白沢先生から作ってもらったのか？」

「一緒に住んでるしね」

妹紅達に弁当を渡した後慧音は僕に近づいてきて、

「はい、吉井君の分です」

「ありがとうございます。上白沢先生」

「「「「「なっ、何だと！！？？」」」」」

みんな何驚いてるんだろう？

「吉井…」

「…何かな？島田さん」

「どういうことかしら？」

「い、いや足を掴みながら聞く事じゃ…」

「大丈夫よ、いｔ「大丈夫じゃないからはなせ…」わ、わかったからはなし…」

た、助かっ…

「「「「「手作り弁当…」」」」」

「……妬ましい」

「「「「「異端者には死を！！」」」」」

「ハイハイ、ジャマヨ」

「「「「「ぎゃあああああああ！！！！！」」」」」

このクラスは本当に大丈夫なんだろうか…

「…あ、てがすべった」

『バッ』（雄二が弁当を叩き落とそうとする）

『パシッ』（慧音がその手をキャッチ）

「えっ」

『ドガッ！！』（一本背負い）

「げふ…」

「いけませんよ？坂本君」

「アハハハ…」

時間は消し飛ぶ！！

屋上

「では皆さん、どうぞ」

試食するって言った以上食べないとね。

「……いただき（スッ」

「あ、ムッツリーニ意地汚いぞい」

『パクッ、ドサッ！』

…えっ…

「どうかしましたか？」

「（スクッ）…『グッ』」

「あ、そうですか」

…

（あれどう思う？）

（わざと…じゃないな…）

（ていうより…）

やっぱり気のせいじゃないか

（（（この弁当…薬品臭が…））））

「さ、あ、明久早く喰えよ」

「な…」

雄二の野郎わかってて…

（逝ってこい）

「さぁ、吉井君どうぞ」

「え、えっと…」

「ドウゾ…」

姫路さんの目からハイライトが…くっ…

た、助けて！えーりん！！

『ガチャ』

「なんか吉井君のＨｅｌｐがきたから登場」

頭に浮かんだ言葉を心の中で叫んだら永琳が来た。

「や、八意先生…どうしたんですか？」

さすがに永琳の登場に雄二達も驚いているようだ

「…」

状況確認中

「姫路さんだったわよね？弁当に何入れたの？」

「え、えっと酸味が足りなかったので…」

「硫酸を…」

……は？

「…試食は？」

「食べたら太るのでしてませんよ（ニコッ」

『ブチッ』

「ちょっと姫路さん、こっちへいらっしゃい…」

「え？先生？」

『ズルズル』

「「「…」」」

『きゃあああ…』

「…とりあえずご飯食べようか」

「うん」

「そうね…」

うん、姫路さんに料理させたら危険だ…

第１２話　恐怖！大量殺戮科学兵器（後書き）

まさかの永琳登場。

まだまだ続く。

第１３話　日常？（前書き）

幽香の召喚獣の腕輪の能力どうしよう・・・
妹紅のは考えたんだけど…

第13話　日常？

まさかの永琳の登場により命の危機を脱した僕であるが・・・

「さて・・・吉井、八意先生とはどういう関係かしら？」

「あと、上白沢先生もです」

島田さんと姫路さんに（悪いほうで）迫られ、

「「「「あんな美人の先生達と知り合いとは・・・」」」」

「「「「うらやま・・・恥と知れ！！！」」」」

「多数決を取る、ここで死刑とする・・・・」

「「「「賛成！！！！」」」」

ＦＦＦ団に囲まれ…僕は十字架に縛られている・・・

幽香と妹紅は慧音からの頼まれごとでいないし、やばいな・・・

くそ、あそこでニヤついている雄二がむかつく

「「ちゃんと躾しなきゃよね（ですよね）」」

いや僕は悪いことしてないし、二人のペットでもないし

「「「「異端児には死を！！！！」」」」

君たちは黙ってろ

「明久」

「何さ・・・雄二」
「今だから言っておく」
？
「俺はお前の幸せがとっても大っきらいだ！！」
「あんた最低だな！！！」
どうする・・・
「では火w「貴方達・・・何をしているのかしら？」へ・・・？」
「「「「あ・・・・」」」」
「私言ったよな・・・明久に手を出したら容赦しないって・・・」
Fクラスの入り口には不死鳥の雛と・・・USCが立っていた・・・
数分後
「明久、大丈夫か？」
「あ、うん縛られただけだからね」
目の前にはFクラスだった物の山・・・あ、雄二原形すらとどめてない。
「ロープ解くぞ～」
「うん、わかった」
はぁ、やっと解放される・・・！？

「も、妹紅ちょっとま・・・」

幽香が姫路さんと島田さんを睨んでて前に・・・ダメだ、気づいていない！！

「え？」

『シュルッ』

現実とは無情にもひもは解け・・・

僕は・・・

「幽香危な・・・」

「え？」

『ドサッ。ポフッ』

幽香を押し倒すように倒れた・・・

はて、何か柔らかいものが・・・

「・・・・・・」

「・・・・・・・・えっと・・・・・」

・・・うん・・・現実を認めよう・・・

これは・・・幽香の胸だ

「／／／／／／！！？？／／／／／／／」

『ドンッ』（幽香が明久を弾き飛ばし）

『ビュン！！』（蹴りを放つ音）

僕が悪いのはわかってるけど、平手じゃなくて蹴りってどうなのよ・・・

『ゴッグシャッ！！！』

あ・・・しr・・・

・・・なんか後頭部に柔らかいものが・・・

あ、僕死んでなかったんだね・・・

「ここは・・・」

「あ、明久おきたのね」

「幽香？」

「その・・・さっきはごめんなさい。いきなり蹴り飛ばして・・・」

「気にしないで。僕が悪いんだし、それより・・・」

なんていうかちょうど胸（ゲフン、ゲフン）　幽香を見上げるような感じになってるけどもしかしてこれ・・・

幽香を見上げている＋後頭部に柔らかい感触＝膝枕ＯＫ？

・・・

「あ、動いちゃだめよ、永琳いわく一応安静にしなさいらしいから」

「でも・・・」

あれが・・・

「大丈夫、妹紅が牽制してるわ」

向こうを見ると、僕に飛びかかろうとしているＦＦＦ団と姫路さんと島田さんを妹紅が足止めしていた

あ、雄二（ニクノカタマリ）が動いた

「じゃあもうちょっと休むよ」

「えぇ、おやすみなさい」

・・・

時間はけし飛ぶ！！

学校終了後

三人で帰宅中

「あ、いけね・・・筆箱教室に忘れてきちゃった」

「まっとこうか？」
「いや、先に帰ってて大丈夫だよ」
「わかったわ、とりあえず急いでね」
さてと、学校に戻らなきゃ・・・

少年移動中

Fクラス

『ガラッ』

「筆箱はっと」
「よ、吉井君！？」
「あれ？姫路さん？」

どうしたんだろう・・・

「どどどどどどどどどーしたんですか？」
「いや、筆箱を忘れたから取りに・・・・・何でそんなに慌ててんの？」
「べべべべ別に慌ててなんかいましぇんにょお！？」

い、いや噛みすぎだから・・・

ふと姫路さんが座ってる席（ちゃぶ台）を見ると、卓袱台の上に何やら可愛らしい便箋と封筒が。

「あ、あのっ、これはっ、その――ふあっ！？」

あ、こけた。

？これは手紙？

《貴方のことが好きです》

えーっと……、これは俗に言うラブレターという奴……だよね？実在したんだ…。

「えっと・・・」

「／／／／／／」

まあ誰かに送るってことだよね、秀吉かな？まさか・・・雄二？

見たものは仕方ない、素直に聞こう

「その人のどこがいいの？やっぱり外見？」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あっ、勿論外見も好きですけど！」

「へぇ～、そりゃ羨ましい限りだね。外見に自信の無い僕にとっては」

「えっ？どーしてですか！？とっても格好良いですよ！私の友達も結構騒いでいましたし！」

「え？ホントに？随分酔狂な友達なんだね」

自分で言うのもなんだけど

「良く分からないんですけど、吉井君が坂本君と二人でいる姿を見

ては『逞しい坂本君と美少年の吉井君が一緒に歩いてるのって絵になるよね』ってよく言っていました」
「び、びしょ？はは…、何か照れるな。お世辞でもうれしいよ」
「『やっぱり吉井君が『受け』なのかな？』とも」
「前言撤回。その友達とは距離を置こう。姫路さんにはまだ早い」
婦女子なのか！？

「それに…」
「……まだ何か？」
「『吉井君って女装が似合いそうだよね』とも」
「姫路さん、その友達とは今すぐ縁を切ろう。間違いなく君を駄目にする」
「私も最近、何となくそう思えて来ました」
「しっかりするんだ姫路さん！君はそっち側に行っちゃいけない！」
やめてくれ！！仕事だから我慢して女装したことはあったけど、精神的にあれはきついんだ！！
いかん！！話を変えねば
「そ、それにしても姫路さん、外見『も』って事は、中身が良いの？」
「あ、えーっと……はい……」
なんとかそらせた…
「その人のどんな所が良いの？」
「や…、優しい所とか……」
「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……、私の憧れなんです」

強い思いを瞳に感じる・・・ほんとに好きなんだな・・・

さてと筆箱ももう回収してるし、あとは帰るだけなんだけど・・・

「姫路さん」
「は、はい」
「その手紙、良い返事が貰えると良いね」
「……はいっ！」

命短し、恋せよ乙女ってね。

おまけ　自宅にての会話

「そう言えば明久」
「？何、幽香」
「蹴ったとこ大丈夫かしら？」
「うんあの程度なら大丈夫だよ」
「そう・・・」

あ、そういえば・・・

「そういえば・・・」
「？どうしたの？」
「いや・・・なんかおぼろげなんだけど・・・蹴られるときに白いものが見えた気が・・・」
「・・・忘れなさい」
「え？」

「忘れなさいって言ってるの！！！／／／／／／／」
「わ、わかったけどなんで・・・」
「だ、黙りなさい！！！」
なんか今日は怒られてばっかだな・・・・

第１３話　日常？（後書き）

ちょっとラブレターの日をずらしました、理由？何となくです。
わ、忘れてたわけじゃないんですよ！？

第１４話　Ｂクラス戦１（前書き）

やっぱ平日は忙しいから書く時間が少ないな・・・
まあ休日も忙しい時もあるけど。
前話の色ですが、友人の完璧な趣味です
オリジナル技ですが、技名とどんな感じの技か、については友人と頑張って考えました。

第１４話　Ｂクラス戦１

Ｆクラス

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

翌日、昨日から跨いでやっていたテストがようやく全科目終了。

大体平均６５位かな？

「午後からＢクラスとの試召戦争に突入する訳だが、殺る気は充分か？」

『『『おおぉぉぉーーーーっ！！！！』』』

殺る気って・・・あ、ちなみにＢクラスの宣戦布告は須川君が（幽香に脅されて）行きました。

予想どうり雄二は僕を行かせようとしたみたいだけどね

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負ける訳にはいかない」

『『『おおーっ！！！』』』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取って貰う。野郎共、キッチリ死んでこい！」

「が、頑張ります」

『『『うおぉぉぉーーーーっ！！！！』』』

姫路さんと一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮。

その姫路さんは、そんな皆のノリに追いていけないらしく若干引き

気味だ。まぁ、それが普通だよね。

「先陣は・・・」

「僕と幽香と妹紅とで行くよ」

「じゃあそれで頼む」

「了解」

「前回は出来なかったけど楽しみね」

幽香・・・なんていうかごめんね・・・

『キーンコーンカーンコーン――』

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『『『『サー、イエッサー！！！！』』』』

昼休み終了のベルと同時に、ダッシュで教室を飛び出してBクラスへ向かって全力疾走。敵を教室に押し込む事が目的なので、とにかく勢いが重要となる

「ま……待って…、下さ～～い…」

だからいきなり指揮官が出遅れてるけどもいちいち構っていられない。

さっき雄二も言ってたけど、渡り廊下の戦闘は絶対に落とせないから、戦力も五十人中四十人を注ぎ込んで勝ちに行く。その代わり教室がほぼスッカラカンになっちゃうけど。

今回のこちらの主武器は数学。Ｂクラスは比較的文系が多いのと、担当教師の長谷川先生は広範囲の召喚フィールドを展開出来るという理由だ。他にも、英語Ｗの山田先生と物理の木村先生もいる。

「いたぞ、Ｂクラスだ！」
「高橋先生を連れているぞ！」

数は大体十人程度。あくまで様子見って所かな？

「いくよ！！」
「「「「「おぁ！！！！！」」」」」

Ｂクラス戦が開始された。

総合
Ｂクラス　モブＡ　１９４７点
ＶＳ
Ｆクラス　モブＡ　７２３点

数学
Ｂクラス　モブＢ　１３７点
ＶＳ
Ｆクラス　モブＢ　６８点

物理

Ｂクラス　モブＣ　１４０点
ＶＳ
Ｆクラス　モブＣ　７１点

圧倒的だ・・・「「「「「「ていうか、あつかいひどくないか！！！？？？」」」」」」

なんか叫んでるけど無視して早くフォローしなきゃやばい！！

「幽香！！妹紅！！・・・いくよ！！」
「えぇ、わかったわ」
「わかった！！」

「「「サモン！！」」」

前回僕と妹紅の召喚獣は説明下から省くとして、幽香の召喚獣は・・・うん私服（原作以下略）に傘を持ってる。あとなんていうか、トラ耳と尻尾って・・・・

気にしないでおこう・・・相手は、っと

英語Ｗ
Ｆクラス　風見幽香　３４５点
ＶＳ
Ｂクラス　モブＤ　１２１点

数学

Ｆクラス　藤原妹紅　１９８点
ＶＳ
Ｂクラス　モブＢ　１１９点

妹紅は得意科目じゃないけど点数が勝ってるから問題はないかな・・・えっと僕は、っと

物理
Ｆクラス　吉井明久　７１点
ＶＳ
Ｂクラス　モブＮ　１８８点

ローマ字が飛んだだと・・・

まあ冗談はほどほどにして、

「「「おい待て！？なんだよあの点数！！？？」」」
「なんかホント驚いてばっかだな」
「まぁ、いいじゃない」
「お～い二人とも僕の心配はしないんだね・・・」
「「当り前でしょ（だろ）」」

ですよね～まぁ・・・

「勝てないこともないけどね」
「な、雑魚のくせに！！」

あれは・・・ハルバートかな？それで相手が斬りかかってくるけど

「ほいっと」

『ガッ、ドカッ』

「な・・・・」

先端付近を地面に抑え込めばなれない操作じゃ動かせないからね。

「ほら、隙だらけだよ」

『ズバッ！！！』

モブＮ　１０９点

やっぱ一撃じゃ無理か・・・なら召喚獣でもできるか練習として

「・・・散れ」

閃鞘　散華時雨

まるで雨のごとく高速で刺突を行う・・・この技の利点は密度を調整して、小範囲か広範囲かわけれるとこである

モブＮ　０点　戦死

「な・・・負けた？」

「嘘だろ！？あんな明らかに雑魚っぽい吉井の召喚獣にやられるなんて！？」

「気を引き締めろ！奴らをただの雑魚だと侮るな！Ｄクラスに勝ったのはマグレじゃないかもしれない！」

うん・・・あんまり上手く出来なかったな・・・要練習だ

「お、やっぱり勝ってるな」
「うん、妹紅も勝ったみたいだね」
「当り前だ」
「明久・・・さっきの技・・・」
「ん？あぁ、やれるかやってみたんだけど要練習だね」
「あれでか・・・」

だって違和感があるんだもん

「す、すいません・・・遅くなりました・・・」

あ、やっと追い付いたみたいだね。って
「姫路さん、大丈夫？」
「何なら少し休んどく？」
「だ、大丈、夫、です。行って、来ます」

まぁ、見た感じ大丈夫かな？

「き、来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かの叫びに、他のメンバーの目付きが変わった。明らかに姫路さんを警戒しているね

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です（な、名前出してもらえた・・・）。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」
「律子、私も手伝う！」

「「「試獣召喚！」」」

Ｂクラスも必死みたいだね・・・でも・・・

数学

Ｆクラス　姫路瑞希　４１２点

ＶＳ

Ｂクラス　岩下律子　１８７点

Ｂクラス　菊入真由美　１５２点

うわ・・・姫路さん４００オーバーだ。ってことは・・・

「あ、腕輪だ」

「あ、はい。数学は結構解けたので…」

一科目４００点以上点数を取ると、特殊能力を持った腕輪が使える様になる。その腕輪が姫路さんの召喚獣の左手首に装備されている

「そ、それって！？」

「私達で勝てる訳無いじゃない！」

向こうの二人が姫路さんの腕輪を見て顔色を変える。

別に腕輪を持ってるからと言って絶対に勝てないとは限らないと思うんだけどな・・・

戦い方次第じゃ圧倒的実力差も覆す事だって難しくない。『戦闘』において一番大事なのは『戦術』じゃなくて『戦略』、要するにどう戦うかだし

「じゃ、行きますね」

姫路さんが手を握り込むと、その動きに合わせて姫路さんの召喚獣が標的の方へ左腕を向けてる。

これって・・・

「ちょっ、ちょっと待ってよ！？」

「律子！とにかく避けないと――！」

大袈裟な位に慌てて横っ飛びする二体の敵召喚獣。しかし

『キュボッ』

「「きゃあああ」」

岩下律子　　０点　戦死

菊入真由美　０点　戦死

うわ・・・レーザーって・・・しかも2体とも黒墨だし、しかも一撃だよ・・・

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ、そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Ｂクラスに動揺が走る。

でもあれは仕方ない・・・てか姫路さんの召喚獣の能力怖すぎ・・・

避けきれるかな？

「み、皆さん、頑張って下さいー」

「や、姫路さん？その指示は指揮官としてはどーかと…」
「うおっしゃあぁーっ！」
「やったるでぇーっ！」
「姫路さん愛してるうううう」

馬鹿ばっかだ

「さて、僕達も行こうか」
「そうね」
「あ、姫路さんは休んでていいよ。疲れてるだろうし、腕輪で結構点消費してるでしょ？」
「あ、はい」

戦場の流れもこっちに傾いたし大丈夫だろう

「あれ？妹紅は？」
「妹紅なら教室に戻ったわよ」

え？

「なんで？」
「・・・Bクラスの代表根本らしいわよ」
「・・・・あぁ、あいつか・・・・」

根本恭二、一言で言えば『卑怯者』。
噂では『カンニングの常連』だとか、『球技大会で相手に一服盛った』とか、『喧嘩に刃物は当然装備（デフォルト）』そして幽香たちにもかなり迷惑をかけた男子だ。

「なるほど。たしかにあいつなら何かしそうだね」

「私達も一応戻ってみる？」

「うん」

ホント、なにもなければいいんだけど・・・

第１４話　Ｂクラス戦１（後書き）

今すごく悩んでいる・・・
根本のとどめ誰で刺そう・・・

番外　キャラ紹介　東方編（前書き）

今のとこ出たキャラについて書きます。書き足し予定ありです。
友人と一緒に考えながら書いてたらカオスに（笑）

番外　キャラ紹介　東方編

藤原　妹紅
読み　ふじわら　もこう
能力：死なない程度の能力
スタイル：身長は１６０位　男子制服でわかりにくい、貧ｎ「Ｃくらいあるわ！！！／／／／」（作者はログアウトしました
外見：白い長髪に赤い目、基本シャツにもっぺを穿いている。
学生服はスカートが慣れないとのことで男子の制服（生徒手帳には一応女子の制服で写っている）
召喚獣の能力：？？？？？？？？？？
点数：古典、歴史に関しては４００点を超えることも。
しかし地理は苦手で５０台常連。ほかの教科は１００～２００台である
口調：基本男口調だが時折女口調になる
設定：幻想郷で明久が初めて会った住人。どうも明久を放置できなくて関わっていくうちに「明久がいる＝妹紅もいる」と言われるほど身近な人間になった。
料理の腕前は普通で、ちょくちょく明久の家に泊まりにいっている。
明久のことは大切な友人であり大好きな人であり、過去のことが原因でとりあえず彼を傷つけるものに対しては容赦がない。

風見　幽香
読み　かざみ　ゆうか
能力：花を操る程度の能力
スタイル：身長は１６５位　トップ８９のＤ「・・・ちょっと話があるんだけどいいかしら・・・」
外見：緑色の髪を肩にかからない程度に伸ばし、紅い目。よく傘を

持ち歩いている
召喚獣の能力：投影
５０点の消費でもう一体召喚獣を作ることができる。しかしその召喚獣は１つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える
点数：全科目３００点越えというオールマイティ。強いて言うなら歴史と古典がたまに４００点を行く
口調：基本丁寧語時折命令系
設定：実は幻想郷で最初の明久の被害者（向日葵の記憶参照）。花の妖怪だけあって花が大好きで傷つけるものには容赦がない。明久のことはよくからかったりするが、攻められると弱いみたいで、時折暴力をしてしまい落ち込んでしまったりしている。明久のことは自分のものと言ったりしているが「明久の相手は明久本人が決めること」と思っている。

上白沢　慧音
読み　かみしらさわ　けいね
能力：歴史を食べる（隠す）程度の能力：人間時　歴史を創る程度の能力：ハクタク時
スタイル：身長は１６５位（帽子を入れて１７５行かないくらい）
・・・大きいです「だまれ！！／／／／」
外見：銀髪の長髪に黒っぽい瞳（人間時）と薄い緑の長髪に赤い瞳と・・・角（ハクタク時）。尻尾もあるらしい
教科担当：歴史
口調：学校では敬語、基本は中性的な話し方
設定：幻想郷の寺子屋の教師だが監視を理由に文月学園の教師をしている。
ワーハクタクだけに運動能力は高い。
お仕置きは基本拳骨、明久達には拳骨では効きにくいので頭突き。
明久のことは出会ったころは姉として面倒を見ていた。

自分が半妖であること知られることを恐れていたがバレてしまう。
しかし態度を変えずいつもどうり接する彼に思いをぶつけるも明久に「そんなことは関係ない、僕は好きで慧音といるだけだよ」と言われて以来、自分が半妖であることを引け目にとらなくなった。
この頃の不安は何かしらと暴走するFクラスである。

八意　永琳
読み　やごころ　えいりん
能力：あらゆる薬を作る程度の能力
スタイル：身長１６５位　すごく・・・大きいです「あらあら」
外見：銀髪の長髪を三つあみにしており鈍い銀色の瞳。赤と青の半々の不思議な服を着ている（学校ではその上に白衣）
教科担当：保健医　保健体育（実際は全科目担当可）
口調：学校では敬語　基本は丁寧語
設定：温和で優しい性格をしているが、怒ると怖い・・・。
幻想郷で医者をしながらも明久のために（本人は問題ないと言うがよく怪我をするため）文月学園の保健医をしている。
天才であり点数はほぼつけようがなく、制限をしている（それでも勝てる人はほぼいない）。
明久については自分達を「ネタばれのため後に表記」ことができる存在という意味で興味を持っていたが自分の過去、罪について聞いても態度を変えない人間性に女性として興味を示した（本人いわく）。
その外見、スタイルからファンクラブ等も多いが「明久君以外にはあんまり興味はないの」と断っているそうだ。

番外　キャラ紹介　東方編（後書き）

・・・これはひどい・・・・

幽香に関してですが・・・歌のネタです！！

第１５話　Ｂクラス戦２　『アキ』（前書き）

友人と明久の能力やお話について話してたら・・・結果

影月・友人「「うわ・・・中二病くせぇ・・・」」

気を取り直してどうぞ

第15話　Bクラス戦2　『アキ』

教室にたどり着くと

「お前達、覚悟はできているな」

「「「「補修はいやだあああああ」」」」

Bクラスの生徒だろうか・・・鉄人に連れて行かれた

「お、明久」

「妹紅、これは・・・」

そこには壊されたちゃぶ台、ペン漁られたカバンが散らばっていた・・・あ、僕達のとこはまだ何もされてなかったみたいだね

「ごめん・・・私が来た頃にはあいつらがいて・・・それに一人逃げられちゃった」

「大丈夫よ、被害をここまで抑えられただけよかったと思いましょ」

「うん、一応何か取られたりしていないか確認しよう？」

「「うん（そうね）」」

うん何も取られてないな。あれはずっと身に着けてるしね。

僕は首にかかってるひし形の結晶思い浮かべた

「どうした？何かあったのか？」

「って雄二どこ行ってたの、危うくもの全部壊されるとこだったじ

ゃないか・・・」
「これは・・・」
「Bクラスだよ」

どこに行ってたのか知らないけど雄二達と秀吉が帰ってきたので簡単に状況を説明した

「被害は少ないが確実に補給テストに響くのう」
「まぁそれはそうと、何でゴリラは教室から離れたりした訳？」
「その呼び方はやめろ。いや、向こうから協定を結びたいという申し出があってな。その調停の為に教室を出ていた」
「協定？」
「ああ。『四時迄に決着が着かなかったら戦況はそのままにして、続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する』ってな」
「それ、承諾したの？」
「そうだ」
「何で？体力勝負に持ち込んだ方がこっちとしては有利なんじゃ――」
「姫路以外は、な」
「「「あっ」」」
「奴等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日という事になる。その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」
「なるほど、だから受けたのかしら？姫路さんが万全の態勢で勝負出来る様に」
「そういう事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」
「うーん…」

なんか引っかかるな・・・

「どうした明久？バカのくせに悩んだりなんかして」
「雄二バカは余計だよ。いや、なんかこう引っかかるものがあってさ・・・」
すると
「確かにそうね・・・こんなことをするようなあの小物がこんな対等な条件の協定をただで出すとは思えないわね」
「とするとなんで・・・」

「吉井、ここにいたか！！」
いきなりの来訪者の声が教室に響いた
「どうしたの？横田君」
「実は島田が人質に捕られた」
「「「「「はぁ！！？？」」」」」
器物破壊の次は人質！？てか島田さんなんで指揮官頼んできたのに人質になってるのさ！！
「お陰で相手は残り二人なのに攻めあぐねている。どうする？」
「わかった、とりあえず状況確認に行こう」
なんにしても急がなきゃ・・・
Bクラス前付近の廊下

そこには島田さんの召喚獣を人質に取る2人のBクラスの生徒がいた。

「そ、そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

敵さんの一人が僕達を牽制してくる。成る程、ただ戦死させるんじゃなくて、人質を取って補習室送りをチラつかせてこっちの士気を挫く作戦か。上手いやり方だ。

科目は・・・歴史か・・・なら

（幽香・・・）

（・・・わかったわ）

「ど、どうする？これじゃ手が・・・」

「総員突撃用意！」

「「「「「え！！！？？？？」」」」」

「ちょ、それでいいのかよ？あっちには島田さんがいるんだぞ！？」

「戦場では犠牲はつきものだよ。1人のためにみんなを危険に合わせるわけにはいかないからね」

「確かに明久の言うとおりだな」

「ええっ！！ちょっと！？」

あともうちょっとかな？

「ちょ、ちょっと待てお前達！！」

「ほらぁ、あっちからもちょっと待ったコールが掛かってるじゃな

いか。もう少し考えてからでも遅くは…」
「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」
「バカだから？」
「バカだからでしょ？」
「バカだからじゃないの？」
「殺すわよ」
「明久に何かしようものなら逆にやるわよ？（ニコッ」
「幽香押さえて！！じゃあ、なんで捕まったの？」

まあ聞いてみるか

「コイツ、『吉井が怪我した』って偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」
「えっ！？島田さん……」
「な、なによ／／／」
「怪我した僕に止めを刺しに行こうとするなんて、あんたは鬼かぁ！！」
「違うわよ！！ウチがあんたの様子を見に行っちゃ悪いっての！？これでも心配したんだからね！！」
「……島田さん、それマジ？」
「そ、そうよ。悪い？」
「へっ、やっと解ったか。それじゃ、大人しく・・・・」
「『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから」
「「・・・総員突撃！！」」

ちょ妹紅、幽香！？

「何で！？」
「そんなあからさまな嘘に騙されて部隊に迷惑掛ける様な奴は要ら

ん！！居ても足手纏いだ！！」
「お、おい待てって！見捨てるのか！？そんなあっさり味方を見捨てるのか！？」
「黙りなさい！！さぁ、そいつにはもう人質としての価値は無いわ！大人しく往生しなさい！！」
「くっ、畜生っ！だったら望み通り、コイツを道連れにしてやるよぉ！！」

！今だ！！

「幽香！！」
「・・・了解したわ」

いや・・・しぶしぶと言わないでね・・・

Bクラスの二人と島田さんの間に2人の幽香の召喚獣が現れる

「「え？」」

歴史
Bクラス　鈴木二郎　３３点
Bクラス　吉田卓夫　１９点
ＶＳ
Fクラス　風見幽香　４１２－５０点ｘ２

「ダブルスパーク」

２本の砲撃が一瞬にして相手の召喚獣を消し飛ばした

幽香の召喚獣の能力・・・それは『投影』

５０点の消費でもう一体召喚獣を作れる。しかしその召喚獣は１つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える。

「戦死者は補習ぅぅぅ！！！」
「ぎゃぁぁぁ！！！」
「助けてぇー！！！」

打ち取った瞬間、鉄先生に担ぎ上げられて連行されるＢクラスの２人。
ふと思ったんだけど、鉄先生はどーやって戦死者の存在を察知してるんだろ？身体のどっかに『戦死者察知センサー』でも着けてるんだろーか？

それより・・・

「島田さん・・・」
「吉井！！よくも見捨てようと・・・」
「・・・ちょっと歯を食いしばりなさい」
「え？」

『パァン！！』

「！？」

いきなり幽香にひっぱたかれたことによって島田さんは目を白黒させる

「貴方ね、敵の偽情報に踊らされたばかりか、指揮官が持ち場を離れるとはどういうことかしら？明久はあなたを信じて指揮を任せて行ったのに、危うく部隊が全滅するとこだったのよ？」

「だ、だって吉井が・・・」
「そんな物理由にならないわ。貴方のその身勝手な行動が、部隊全体を危険に巻き込んだのよ？分かっているの！？」
「ぁ・・・・・・ぅ・・・」
「さっき言った台詞、アレは芝居でも何でもないわ。自分本位な事しか考えない様な奴は、居たって邪魔になるだけだわ・・・足手纏いなのよ！！」
「幽香！！」
「・・・ちょっと頭に血が上ってたわね・・・ごめんなさい」
そう言って幽香はみんなを連れて教室に戻っていく・・・ハァ・・・
「島田さん・・・」
「・・・・・・」
「あ～、ごめんね島田さん。幽香って興奮し過ぎると口調が乱暴になっちゃうから…」
「・・・・・・」
「でもさ・・・、幽香の事、あんまり悪く思わないであげて。あれでも島田さんの事、かなり心配してたみたいだからさ・・・。だから」
「分かってる」
「え？」
「風見さんが言ってた事、間違ってない。ウチは取り返しのつかない事を仕出かす所だったんだ。叩かれて当たり前よ」
「島田さん・・・」
「・・・」
うぅ・・・空気が・・・よし
「だ、大丈夫だよ！失敗は誰にだってあるんだからさ！また次の機

会にこの汚名を挽回すれば良いじゃないか！」
「吉井、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』だったと思うけど？」
「あれ？そーだっけ？」
「全く…、何でウチでも知ってる様な熟語を日本育ちのあんたが知らない訳？」
「ぐっ・・・・」
「・・・・・ふふっ」
「ほ、ほら島田さん掴まって！僕達も早く教室に戻ろうよ！」
「あ、誤魔化した」
「気のせいです」

ふう、なんとかなった・・・

「吉井・・・・・」
「ん？何？」
「ごめん」
「良いよ、別に。島田さんが無事で良かった」
「あと・・・・ありがと・・・・」
「うん・・・・」

やっぱりお礼いわれるってちょっと恥ずかしいな

「ねぇ、吉井」
「な、何？」
「今度からさ『アキ』って呼んでも良い？」
「え？」
「ダメ？」
「いや、ダメでは無いけど…」
「その代わりにさ、ウチの事も『美波様』って呼んでも良いから」
「僕だけ様付け！？」

「ふふっ、冗談よ、冗談。」
「島田さんの場合、冗談には聞こえないんだけど・・・」
「じゃなくて？」
「・・・美波」
「うむ、よろしい」

なんか嬉しそうな雰囲気だな・・・

「ほら、皆きっと待ってるよ？早く行こ、アキ♪」
「おわっ！？ちょっ、島・・・美波、そんな引っ張んないで！」

ま、元気になってくれたし、良っか。

第15話　Bクラス戦2　『アキ』（後書き）

いつもこれなら・・・
いや言うまい

第１６話Ｂクラス戦３　小物の罠（前書き）

よし、ある程度どうするかは決まった！！後はそれを書けるかだ！！

無理だ・・・

明「あきらめるのはや！！？？」

第１６話Ｂクラス戦３　小物の罠

さて協定どうりＢクラス戦は明日まで持ち越しになったけど・・・

「Ｃクラスが試召戦争の用意を始めているだと？相手はＡクラスか・・・いやそれはないだろうから。

漁夫の利を狙うつもりか・・・いやらしい連中め」

ムッツリーニの情報いわくＣクラスが怪しい動きをしているらしいＣクラス・・・あれ？なんか大切なことを見落としてる気が・・・

「で、どうするんだ？」

「協定を結ぶか。ま、Ｄクラスを攻め込ませるぞって脅しをかければいいだろう」

「わかったわ」

Ｃクラスと協定を結ぶということになり、雄二、僕、幽香、妹紅、ムッツリーニで行くことになった。

姫路さんと秀吉は教室で待機してもらっている

少年少女移動中

Ｃクラス

「失礼するぞ。すまないがＣクラス代表はいるか？」

「私だけど、何かようかしら？」

僕たちの前に出てきたのはＣクラスの代表の小山さんだった

あれ？人の気配が・・・！！！

「Ｆクラス代表としてＣクラス「ちょっと待って雄二」ん？どうした」

「えっと小山さん」

「何かしら？」

「あそこに誰を隠してるんですか？」

「！？な、何を言ってるのかしら？」

そうだ・・・Ｃクラスといえば・・・

「言い方が悪かったかな？根本君そんなとこに隠れてないで出てきたらどう？」

「なっ！！」

根本君と小山さんは・・・付き合ってるんだ

ｓｉｄｅ雄二

な・・・何言ってんだこのバカ？根本がここに・・・

「っちばれたか、おい坂本を逃がすな！！やれ！！」

なっ！？マジでいただと！？

「っち！妹紅、ムッツリーニ！雄二を連れて逃げて！！！」

「・・・・・了解」

「わかった。明久気をつけろよ」

「大丈夫だよ。幽香足止めするけど手伝ってくれる？」
「聞かなくてもわかるでしょ？」
藤原と風見も入った時から戦闘態勢だったが・・・
「ほら、代表行くぞ。お前が戦死したら困るんだ」
「あ、あぁ・・・」
明久お前・・・なんなんだ？

ｓｉｄｅ明久

さてと、雄二も逃げたことだし
「根本君、約束を破るなんてひどいじゃないか」
「うるせぇ！！お前ら！！こんな雑魚早くつぶせ！！！」
「・・・・・・」
「ゆ、幽香？」
「・・・大丈夫よ。さ、行きましょう明久」
「だね」
「「サモン！！」」

数学
Ｆクラス　吉井明久　６８点
Ｆクラス　風見幽香　３１２点
ＶＳ
Ｂクラス　モブｘ１０　平均１７２点
「「「「な、なんだよあの点数」」」」

「こいつら驚くしか脳ないのかしら・・・・」
「あははは・・・・」
「怯むな！！数でつぶせ！！」
「「「「「「「おぉ！！！！！！」」」」」」」
あら？根本君がいない・・・うわ・・・逃げてるよ・・・
「明久、少し時間作ってくれないかしら？一気に吹き飛ばすから」
「了解、じゃあ行くよ！！」
「な、吉井が一人で突っ込んできたぞ？」
「は、あんな雑魚すぐつぶしてもう一人を一気につぶすぞ！！」
はぁ、ひどい言われようだな、ホント
「・・・散華時雨」
閃鞘　散華時雨、刺突の密度を調整することで範囲を調整することができる。
だから・・・
「な、近づけねぇ」
「近づこうにも攻撃で押される！？」
広範囲は威力が減るものの、足止めにはちょうどいい！！
「明久！！準備ＯＫよ！！」
「わかった」
「あ、攻撃がやんだ？」
「・・・消し飛びなさい・・・」
「「「「「え？」」」」」

マスタースパーク

Ｂクラス　モブｘ１０　０点　戦死

「「「「「え？」」」」」

幽香の召喚獣は基本傘とかによる攻撃だが、力をためることによって砲撃とかを撃つことができる。
これは召喚獣自身の能力で腕輪とかを取る必要はないようだ。

「さ、逃げるよ」
「そうね」

少年少女逃避中

Ｆクラス

「ただいま～」
「ただいま」
「お、大丈夫だったみたいだなお疲れさん」

妹紅が労いをくれる

「しかし、どうするのじゃ？」
「こうなった以上、Ｃクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、正直Ｂクラス戦の直後にＣクラス戦はきつい」

ま、それが狙いだろうね

「まぁ、向こうがその気ならこっちにも考えがある」
「考え？」
「あぁ、明日実行する。とりあえず今日はこれで解散だ」

・・・

保健室

「失礼します、八意先生いますか？」
「あら、明久君どうしたの？あと誰もいないしいつもの呼び方でいいわよ？」
「じゃあ、永琳。じつは・・・」

キングクリムゾン！！

次の日の朝

「考えがあるって言ってたけどどうするの？」

幽香がそう質問すると雄二は

「あぁ、コイツを秀吉に着てもらう」
「んむ？それは別に構わんが、ワシが女装してどーするんじゃ？」

いや、構おうよ、男としてみてほしいなら構おうよ秀吉！！

「なに、秀吉には木下優子としてAクラスの使者を装ってもらう」

木下優子。秀吉君の双子のお姉さんであり、Ａクラス所属。違いといったらテストの点数と喋り方位しか見当たらない程秀吉君にそっくり。しゃべり方なら秀吉はすぐにまねれるからほぼ見分けようがない。
成る程ね、そのお姉さんに化けてＡクラスとして圧力を掛けようって事か。

「という訳で秀吉、早速用意してくれ」
「う、うむ…」

坂本君から制服を受け取って、その場で生着替えを始める秀吉

「「「「「／／／／／／／」」」」」

おい、君達秀吉は男だ、あとムッツリーニ写真を取らない。
姫路さんに美波、まるで女の子を見るようにショックを受けないって、眼つぶしは危ないって！！

「よし、着替え終わったぞい」
「じゃあＣクラスに行くぞ」
「一応付いて行くよ」

またあんなことがあったら困るしね

少年少女移動中

Ｃクラス前

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

「気が進まんのぅ…」
「そこを何とか頼む」
「むぅ……。仕方無いのぅ…」
「悪いな。とにかくあいつ達を挑発してAクラスに敵意を抱く様仕向けてくれ。お前なら出来るハズだ」
「はぁ……。あまり期待はせんでおくれよ…」

そう言って秀吉はCクラスへ向かった・・・大丈夫かな？

『ガラッ』

『静かにしなさい、この薄汚い豚共ッ！』

……マジか？

「……流石だな、秀吉」
「うん。これ以上無い挑発だね…」
「もう既にAクラスに敵意が向いてるんじゃない？」

てゆーか、秀吉のお姉さんってあんな感じなの？

『なっ！？何よアンタ！』
『話し掛けないで！豚臭いわ！』

うわ、理不尽だ・・・

『アンタ、Ａクラスの木下ね？ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！』
『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』
『なっ！？言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですってぇっ！！』

いや、誰もＦクラスなんて言ってないから

『手が汚れてしまうから本当は嫌なんだけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。丁度試召戦争の準備もしているみたいだし、覚悟しておきなさい。近い内に私達が薄汚い貴女達豚共を始末してあげるから！アハハハハハ――！』

「ねぇ、明久演劇部って・・・」
「妹紅言わないで・・・僕もすごい悩んでるから・・・」

「これで良かったかのぅ？」

ぅわー、凄いスッキリした顔してるー。何かお姉さんに対して不満でも溜まってたのかなぁ・・・。

「ああ。とても素晴らしい仕事だったぜ。ホレ」

『キィィィィ！！ムカつく！！！何よ調子に乗ってぇ！！！Ｆクラスなんか相手にしてられないわ！！Ａクラス戦の準備を始めるわよ！！』

「「「うわっ・・・・」」」

・・・気を取り直してBクラス戦に向けて用意するかな

時間はけし飛ぶ！！

「ドアと壁を上手く使え！戦線を拡大させんじゃねーぞ！」

坂本君の怒号にも似た指示が飛ぶ。

「勝負は極力単教科で挑め！補給も念入りにしろよ！」

雄二の指揮の下、ここ数時間はほぼ順調かの様に見えた・・・

しかし

「姫路頼んだ！！」

「はい、さも・・・・！？」

さっきから姫路さんがおかしい・・・なにが・・・

あれは・・・根本君・・・！！！

その手に持っていたのは・・・手紙・・・

そう姫路さんの・・・

「・・・姫路さんきついなら下がっててていいよ？」

「え？でも・・・」

「大丈夫だから、じゃあちょっと雄二のところに行ってくるね」

はぁ・・・ふっ・・・面白いことしてれるじゃないか

根本・・・

第１６話Ｂクラス戦３　小物の罠（後書き）

さあ、次回
お前の敗因は俺を怒らせたことだ
ジョジョネタですねわかります

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・（前書き）

さて友人から頼まれたが・・・うまく書けるかな？

先生の名前変更

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・

「・・・雄二・・・」
「明久？なんだ逃げてきたのか？」
「ちょっと話がある」
「・・・なんだ？」

真剣な話と読み取ったのだろう・・・雄二がまじめな雰囲気になる

「姫路さんを戦線から外してほしい」
「なんでだ？」
「それは言えない」
「なにか、策でもあんのか？」
「Dクラスの手を借りる位かな？あと根本君の服がほしい」
「明久お前…」

？あっ・・・・・

「いや、前回教室荒らされたでしょ？その仕返しにだよ」
「・・・人数はさけないぞ？」
「幽香と妹紅、あとムッツリーニがいれば」
「わかった。だが絶対成功させろよ」
「当り前でしょ」

さてじゃあ用意するかな・・・

Dクラス

「ごめん待たせた？」
「いえ？待ってないわよ」
「大丈夫だよ」
「そっか」

さてあとは・・・

『ピピピッ』

「はい」
『・・・準備ＯＫ』

「ごめんなさい吉井君、お待たせしました」
「大丈夫ですよ」

さて永琳もきたしやるか！！

「じゃあ先生お願いします！！」
「はい、試験召喚獣召喚を承認します」
「！！サモン！！」

僕は召喚獣を召喚し・・・

『ドカッ！！』

壁を殴りつけた・・・

ｓｉｄｅ雄二

「お前らいい加減あきらめろよな。教室の出入り口に群がりやがって暑苦しい事この上ないっての」
「どうした？軟弱なBクラス代表はそろそろギブアップか？」
「はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？」
「無用な心配だな」

『ドンドン！！』

始まったみたいだな・・・

「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」
「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」
「けっ！口だけは達者だな負け組み代表様よぉ」
「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな」

『ドンドン！！』

「・・・さっきからドンドンとうるせぇな。それにこの暑さはなんだ。エアコンきいてんのか？おいッ窓全部開けとけよ！」
「・・・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」
「なんだよ！散々ふかしておきながら逃げるのか！全員で一気に畳み掛けろ！！誰一人生きて帰すな！！」

頼むぞ、明久！！

side明久

っく・・・さっきから殴ってるけど間に合わない・・・

「明久・・・手が・・・」

さすがにフィードバックで手がボロボロだな・・・

？てか直接やったほうが壊せるんじゃ・・・

「三人ともちょっと距離置いてね」

「「「え？」」」

ふう・・・やることは簡単だ・・・視ればいいんだ・・・

ｓｉｄｅ妹紅

なんか黙っちゃったけど・・・！？まさか

次の瞬間周りが・・・殺気に、いや、でも優しい雰囲気に包まれた・・・

これは・・・

明久を見るとその瞳（め）は青く、いや深い蒼に輝いていた・・・

ｓｉｄｅ明久

「・・・視えた」

あとは力を調整しないと壊しすぎちゃうからな・・・

「ふう・・・・蹴り穿つ！！」

閃走　一鹿

真横にきれいなまでな一直線の蹴りを壁に・・・点に叩き込む！！

『やれ！！明久』

『ドガッ！！！』

『ガラガラガラ・・・』

僕の蹴りは点を貫き・・・壁に人が通れる大きさの大穴を開けた・・・

「な、壁を壊すなんて、どういう神経してるんだあの野郎！！」

「藤原妹紅と」

「風見幽香、Bクラス・・・」

「「「やらせるかあああ！！」」」

Bクラスの人達が二人の前に立ちふさがった。さすがにこの人数はきついかも・・

「は、結構驚いたが・・・残念だったな」

『スタッ！！』

まだだ！！

ここで少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によってテストの結果に特徴が現れるんだが・・・

例えば、数学の木内先生や物理の森田先生、日本史の五十嵐先生は

採点が早い。

世界史の田中先生や生物の不知火先生は点数のつけ方が甘く、
数学の長谷川先生や英語のリアン先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生や歴史の上白沢先生は
多少の事は寛容で見逃してくれる。

あと、基本承認に関しては西村先生と高橋先生以外は担当科目の承認しかできない

話を戻すが、じゃあ保健体育の先生はというと、採点が早いわけでも甘いわけでもなく
召喚可能範囲が広いというわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れた行動力』である
すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った

「・・・・・・Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムッリーニと保健体育の鈴村先生だ

これで・・・

「Bクラス近衛部隊が受けますッ！！」
「残念だったな、あとはそこの雑魚だけ、お前達の負けだ！！」
「っく」

雄二が悔しそうに呻いてるけど・・・

「いや、これでいいんだよ・・・」

「なに？」

そう言えば、さっきの説明だけど・・・実は言うと例外な人がいる。

それは・・・

「八意先生、Ｆクラス吉井明久、Ｂクラス根本恭二に現代文で勝負を挑みます」

「な、お前バカか？保健医がそんなこと許可できるわけ…」

「承認します」

「え？」

それは保健医八意永琳は全科目の試験召喚獣の召喚を承認することができるということ・・・

「サモン！！」

現代文

Ｆクラス　吉井明久　１１２点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　２３５点

「ふん、確かにちょっとは高いようだがその点数で勝とうなんて「・・・行くぞ・・・」なっ！！」

根本君の・・・コイツの御託なんかどうでもいい・・・

「一瞬で終わらせる・・・」

「あ・・・明久切れてるね・・・」
「えぇ、切れてるわね・・・なんか帰りたくなったわ・・・」
あっちで妹紅と幽香がなんか言ってるし、永琳が冷や汗を流しながらひきつった笑顔をしているけど無視だ！！
「ここに貴様の居場所などない・・・消え去るがいい・・・」
閃鞘　凶刺死獄
一瞬で接近した僕の召喚獣は根本の召喚獣の腕と足を切り払い、そしてとどめに心臓、喉、眉間、水月に一瞬で刺突をたたきこんだ・・・
Bクラス　根本恭二　0点　戦死
「え・・・？」
「「「「「な、う、嘘だろ・・・」」」」」
「根本・・・」
「！？ひ、ひっ！！！」
「一つだけ言ってやる。今回の君の敗因はただ一つ・・・」
「僕を・・・『俺』を怒らせた・・・ただそれだけだ・・・」

第17話　Bクラス戦ラスト　君の敗因はただ一つ・・・（後書き）

ふう・・・なんとか書けた・・・

第１８話　Ｂクラス戦　戦後対談（前書き）

やっぱ女装は外せないよね！！

第１８話　Ｂクラス戦　戦後対談

「いつつ・・・」
「ほら、もう少しで終わるから我慢しなさい」
うっ・・・永琳の口調がちょっと崩れてる・・・お、怒ってるのか？
「お主・・・思い切った行動に出たのう」
「あはは、それもそうだね」
僕は穴のあいた壁を眺める・・・あんまり大きな穴にはなってないみたいだね、よかった
「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。なぁ、負け組代表？」
「・・・・・・・」
おとなしいな・・・どうしたんだろう？
「いや、明久の気を当てられたんだろう」
「ご愁傷さまね」
「？何を話ておるんじゃ？」
「木下君は気にしなくていいのよ」
そこまで強くした覚えないんだけど（前回の最後のセリフの時に軽く気当てをやっています
「本来なら設備を明け渡してもらい、お前達には素敵な卓袱台をプ

レゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に、当然周りの皆がざわつき始める

「落ち着け、皆。前にも言ったが俺達の目標はAクラスだ。ここはあくまでゴールじゃなく、通過点にすぎない。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

「……条件はなんだ？」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

うわ・・・誰もフォローしないや・・・

「そこで、お前達Bクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

「ああ、それだけで良い。ただし・・・・」

そう言って雄二は・・・

「そのままじゃあ面白くねぇから、Bクラス代表がコレを着てさっき言った通りに行動してくれたら見逃してやろう（笑）」

Cクラス対策で秀吉が着ていた女子の制服を取りだした。

どこにしまってたんだろう・・・

「さ、坂本・・・」
「ん？なんだ藤原？」
「えっと、その・・・」
「坂本、相手に女装させる趣味があったなんて・・・驚いたわ（棒読み）」
「な！？風見、趣味じゃねえよ！！」

雄二が幽香にいじられるのは無視しとこう・・・それより永琳いつまで体触ってるんですか

「壁を壊すような力を使ったんですから、他のとこに影響がなかったか調べてるのですよ」

心を読まないでください

「ばっ、バカな事を言うな！この俺がそんなふざけた事を！」
「「「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」」」
「「「任せて！絶対にやらせるから！」」」
「「「「「それだけで教室を守れるなら、やらない手は無いな！」」」」」
「うをおぉぉぉーーーーい！！？」

うん・・・すごい団結力だねBクラス・・・

「んじゃ、決定だな」
「くっ、よ、寄るな変たぐほぅっ！？」
「取り敢えず黙らせました。閣下」
「お、おう。ありがとう」

へ～いいパンチだな・・・

「じゃ、着付けに移るとするか。明久、任せた」
「えっ、僕！！？何か嫌だな・・・」
「じゃあ藤原あたりに・・・」
「わかったやるよ・・・」

まぁ、手紙のためだしね・・・

「う、うぅ・・・」
「あ、やば・・・」
「落ちなさい」

『ガクッ』

幽香…頸動脈を絞めるって・・・
まぁ一年の頃何かしらと近づいてきてうざかった、って言ってたもんね

「これってどうつけるんだ？」

女子の制服なんて着け方わかんないな・・・

「私がやってあげようか？」
「そう？悪いね。それじゃ、せっかくだし可愛くしてあげてよ」
「あ、それは無理。土台が腐ってるから♪」

・・・やばい、否定できない・・・

さて目当てのモノは、っと

「・・・あった」
「何があったんだ？」
「うわっ！？・・・何だ妹紅か・・・脅かさないでよ」
「え？あ、ごめん。それよりその手紙何？」
僕の持っている手紙を見ても妹紅が聞いてくる。あ、そうか妹紅達知らないんだ
「姫路さんの手紙だよ」
「ふ～ん、渡しとこうか？」
「そうだね、お願い」
さてと目当てのものは見つかっ・・・
『ガラッ！！』
「失礼します」
「え？上白沢先生どうしたんですか？」
慧音が来たことにみんな驚いてる・・・
あ、やばいかも・・・・
「ちょっとね・・・あ、いた（ニコッ」
「！？」
慧音が笑顔でこっちに・・・逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・
・
『ゴツン！！！』

「！！！！！？」

やパリ、こノ頭突きは痛イ！！

「いくぞ、明久・・・」

「け、慧音・・・・口調・・・」

「妹紅、黙っときなさい。巻き添え食らうわよ・・・・」

「幽香…」

『ズルズルズル、ガラッ！！』

あ～痛みで口調が・・・それよりこの後説教か・・・・

ｓｉｄｅ妹紅

「な、なんなんだあれ・・・？」

「いや、慧音がマジギレしてただけ」

「そ、そうか・・・」

うん、坂本あんまり突っ込まなくて正解だ

さてこの服は・・・ごみ箱に入れとくか・・・手紙、姫路さんに渡しに行くかな。

少女移動中

「よっ、姫路さん」

「！？ふ、藤原さんですかどうしたんですか？」

「ハイこれ」
「!?これは・・・」
「事情は何となく察してる。あ、大丈夫だよ?明久は何も言ってないし中も見ていないから」
「その・・・吉井君は・・・?」
「慧音に説教されてる、まぁ今日のはやりすぎちゃったからね」
「そうですか・・・ほんと吉井君って優しすぎますよね」
「・・・そうだね」

私がどういう存在かしいても受け入れたり、１０救うために自分をかえりみないほどだけどな・・・

「その、藤原さん」
「?なに」
「藤原さんは吉井君のことが・・・好きなんですか?」

・・・

「好きよ。私だけじゃない幽香もね」
「そう、ですか・・・」
「でも・・・」
「?」
「幽香もそうだけど、私達は『明久の相手は明久自身が決めること』だと思ってるの」
「・・・強いですね・・・」
「強くないわよ・・・まぁ、私にできることは選んでもらえるように頑張ることくらいだけどね」

全然気づいてくれないけどね

「・・・・」
「さて・・・帰るか・・・あ、あと姫路さん」
「なんですか？」
「私のことは妹紅でいいよ」
「じゃあ、妹紅ちゃんって呼びますね」
「ちゃんって・・・まぁ慣れるしかないか・・・じゃあね」
「はい」

さて幽香と合流して明久を迎えに行くかな

第18話　Bクラス戦　戦後対談（後書き）

おまけ

ただいま説教中

「壁を召喚獣といえ、素手で殴るとなんてどういうことだ！！」
「いや・・・なんていうか、ね？」
「・・・お願いだ・・・」
「え？」

『ギュッ』

ふいに抱き締められて・・・これは・・・涙？

「お願いだ・・・私達をあんまり心配させないでくれ・・・」
「・・・うん・・・ごめんね慧音」

ホント僕って女の子の涙に弱いな・・・

ＰＶ５万超え記念短編　殺人貴との会合（前書き）

題名の通り

紅魔館、紅い霧編後となっております

ＰＶ５万超え記念短編　殺人貴との会合

吉井明久こと僕はとても悩んでいた・・・

「なんか能力に目覚めたのはいいけど・・・名前もわからないし、鍛えようにもどうすればいいのか解らないしな・・・」

能力の一つである『　』ッて場所に行ったことによって目覚めたこの能力

なんていうかスイッチ？みたいなものを切り替えると視界に点と線が見え、線を切るとどんなモノだろうと切ることができ、点をつくとあらゆるものを殺すことができるという能力・・・

僕はこれに目覚めてから結構立つけどどうすればいいのか答えが出すことができず、森を歩いていた・・・？森？

「あ・・・迷ったあああああ！！！」

どうしよう・・・？あれは・・・人！？まさか同じように迷った・・・！！！

その人は妖怪に追いかけられていた・・・

「くっ！！」

何か出来るわけではないが・・・追いかけなきゃ！！

少年追跡?中

しかし・・・そこで見たのは妖怪に襲われる人ではなく、妖怪と対等に戦い、ましてや倒している人だった・・・それ以上に

「・・・すごいな・・・」

その人はたった一本のナイフで妖怪を解体していく、乱雑にではなくあまりにもきれいな動きで・・・

いつの間にかその戦闘は終わっており、その人は僕を見ていた・・・

ｓｉｄｅ???

はぁ・・・空間を飛んでみればいきなり魔物?に襲われるしついてないな・・・

?

そこにはいつからいたのだろうか、中学生くらいの少年がいた・・・

!?な・・・いやこれは・・・魔に対して感じるものじゃなくて・・・なんていうんだろうか・・・

まるで同類にあったような・・・

まぁいいか

「えっと君、ちょっといいかな?」

「え?あ、なんですか?」

「ここに永遠亭ってとこがあるって聞いたんだけど・・・」

「ありますけど・・・それよりお兄さんその目・・・」

あ、いけない聖骸外したままだった。

「僕と似たような目ですね」

「・・・え？」

今この少年は何て言った？この『直死の魔眼』を『僕と似たような』？

「あ、いや気のせ「ね、君・・・線と点が見えるのかい？」え、はい」

「そうか・・・」

なるほど・・・さっきの感覚はそういうことか・・・

でも、何だかおれとは違うような・・・

「すまないけどそれについて詳しく教えてくれないかな・・？」

「え？あ、いいですけど・・・」

・・・？あっ・・・

「あぁ、ごめん。自己紹介がまだだったね。俺は・・・・」

「遠野志貴、ちょっとした物探しの旅人だよ」

ｓｉｄｅ明久

互いに自己紹介をした後、志貴さんがここに来た理由と僕がこの能力に目覚めた経緯を話した。

「まさか、先生が前言ってたところ？でも彼はそれよりも・・・」

「えっと・・・志貴さん？」

「あぁ、ごめんそれについてだったね。
それは『直死の魔眼』と言って物の死を点や線としてみる力なんだよ」
「物の死・・・」
「怖い・・・かい？」

なんていうんだろう・・・確かに怖いかと言われれば怖いけど・・・

「僕は約束したんです。たとえどんなことがあろうと前に進み続けるって・・・」
「・・・」
「それに・・・」
「それに？」
「これは間違いなく僕自身の力である意味自分自身です・・・それを否定するなんてバカみたいじゃないですか」
「・・・・」
「？どうしたんですか？」

いきなり黙り込んだけどどうしたんだろう・・・

side志貴

驚いた・・・自分自身だから否定するのはバカみたい・・・

「ぷっ」
「？」
「あはははは！！！！」
「な、なんで笑うんですか！！」

「いやごめん、ふふそうか自分自身か・・・」
まさかこんな小さい子から教えられるなんて俺も歳かな・・・まぁもう１００はいってそうだけど・・・
「あ、その・・・志貴さん頼みがあるんだけど・・・」
「？なんだい」
「僕に戦い方を教えてくれませんか？」
「・・・なぜだい？」
「僕は、守りたい人たちがいるんです・・・」
「・・・・」
「それに僕は前に進み続けるって誓ったから・・・」
「力を手に入れるってことは他人を傷つけるかもしれないってことだよ？」
「・・・・」
「それに逆に傷つけられる覚悟もいる。もしかしたらその守りたい人を守れないかもしれない」
俺は・・・守れなかったから・・・
「それに力を手に入れるということはそれだけ過酷だということ、場合によっては死ぬかもしれないんだよ？」
「ですね・・・でも・・・」
「僕は、何も努力しないで守れなくて後悔するよりも、何かを守るために血反吐を吐くような努力をするほうがましだ」
「それで守れたなら最高でっすけどね」
・・・・・人によっては夢、理想って言うかもしれないな・・

「大怪我するかもしれないよ？」
「今さらですし、覚悟の上です」
「最悪死ぬかもしれない」
「死ぬ覚悟でなんかしません、絶対生き残ってやります」
「・・・・・」

はぁ・・・これはてこを使っても動かないだろうな・・・

「はぁ・・・負けだ」
「え？じゃあ・・・」
「いいよ、教えてやるよ。ただしあんまり期待するなよ？」
「はい！！」

でも、こんな子にあんな思いはさせたくないし、大人である俺から教えれることは教えようかね・・・

「まあ、話も決まったことだし明久」
「？なんですか？」
「永遠亭まで案内してね？」
「あっ・・・・」

本当に大丈夫かな・・・

ｓｉｄｅ明久

志貴さんに弟子入りしてから毎日訓練を行った・・・
それこそ本当に血反吐を吐くような毎日。妹紅達やお母さん達とかも心配とかしてたけど、
僕はそれを説き伏せて毎日志貴さんのとこに通いつめた。

志貴さんいわく体力面や肉体能力に関しては基礎ができているから後はどううまく体を使えるかが問題らしい。幽香・・・・君の特訓(いじめ)のおかげだね・・・
志貴さんに技の基礎を教えられたり、組み手をしたり・・・はっきり言って折れてない骨とかないんじゃないかと思う。でも僕はあきらめなかった・・・
だってあきらめたら必死に教えてくれる志貴さんにも失礼じゃないか。
ある程度したころ・・・僕は技・・・七夜の技術の伝承が始まった・・・

side志貴

初めに言おう異常だ・・・体力面等もそうだが（それを行った時明久は遠い目をしていた）まぁ、これは『　』に到達したときに身体能力等自体も強化されているのかもしれない（ゼルレッチさんがそんなことを言ってた気がする
だが問題なのは学習能力だ。教えた動き、技、道具の使い方、体の使い方、魔眼の使い方をまるで水を吸い取るように、しかも限界なく吸収しものにしていくのだ。
何より・・・それは技を教えているときに起こった・・・

「志貴さーん」
「ん？どうしたんだ？」
「実は見てほしいものがあって・・・」

そう言うと明久は刀を構え・・・

「・・・散れ・・・」

閃鞘　散華時雨

「・・・なっ・・・・」

「八点衝とかを刀とかでしようとしたら難しくて考えたんですけどどうですか？」

「・・・自分で考えたのかい？」

「はい！！あ、これのすごいとこは密度を変えると範囲を変えれるとこなんですよ」

その七夜の技から新しい技を作る才能、そしてそれを完成とまで昇華させる技術・・・

本当にこいつは人間なのか？

ｓｉｄｅ明久

夜・・・僕と志貴さんは森で試合をしていた・・・

『キン！！ドカッ！！』

「ぐっ！！」

「・・・隙だらけだ」

閃鞘　八穿

志貴さんが視界から外れ・・・真上から斬りかかってきた

「蹴り穿つ！！」

閃走　六兎

僕はそれに対して瞬間的に六発蹴りを叩き込み志貴さんを吹き飛ばすも・・・志貴さんはひょいっと受け身を取り・・・

「遅い」

閃鞘　一風

僕の胸あたりに肘をたたきつけそのまま後ろの地面に叩きつけた

「がはっ！！？？？」

頭から叩きつけられていたら死んでいただろう・・・

「はい、ここまで」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ふう、でも本当に強くなったね」

「まだ志貴さんに決定打入れれませんでしたけどね・・・」

「あはは、弟子にそんなに簡単に抜かれてたまるかよ。」

うぅ・・・でもやっぱ一撃くらいちゃんと当てたいな・・・

「・・・明久・・・」

「？なんですか？」

「俺は今日ここを出る」

「・・・やっぱりですか・・・」

「？わかってたのか？」

「だっていきなり試合するぞって言われたらわかるでしょ」

ホントは信じたくなかったけど・・・

「俺が教えれることは教えた。あとはお前がどう昇華させるかが問題だ」
「・・・はい・・・」
「でだ、お前にこれをやろうと思ってな」
そう言って志貴さんが取り出したのは・・・
「こ、これは・・・でもこれって志貴さんのじゃ・・・」
『七夜』と刻みこまれた金属棒・・・仕込みナイフだった・・・
「あ、これはなまぁ物探ししてる途中の世界で拾ったものなんだが・・・」
「これの持ち主・・・『俺』がどうなったか知らない。もしかしたらこれを使わなくていい生活をしているか、もうとい昔に死んだかもしれん。倉庫で見つけたからな」
「それって泥棒じゃ・・・」
「だがこのナイフは頑丈でな。吸血鬼の一撃をくらっても刃こぼれすら起こさない」
話をそらした・・・・
「俺が2つ持ってても仕方ないし、こいつも使われるのが本望だろうし」
「・・・」
「それに師匠から弟子に送れる物として明久に受け取ってほしい」
「・・・はい」
それを受け取った時、持ち主のいろんな思いを感じた気がした

「・・・・」

『カシャ！！チャキッ』

すごい。まるで合わせたかのように手になじむ・・・

「さて渡すのは渡したし・・・自主練怠るなよ？」

「はい。志貴さんもお元気で、姫様よくなるといいですね」

「あのお姫様は気ままだからね。じゃあな」

そう言って志貴さんは懐から出した宝石剣で空間を切り裂き消えて行った・・・

「ふう、とうとう今日、Ａクラス戦か・・・」

しかし懐かしい夢を見たな・・・あれからいろんなことがあった・・・

自分の能力がわかったり、この目の本当の正体がわかったり、新しい仲間ができたり・・・

「志貴さん、僕は今を進んでいますよ」

僕は制服にいつもどうり志貴さんから受け取った『七ッ夜』仕込ませ、

大切な仲間達が待つロビーへと向かった

ＰＶ５万超え記念短編　殺人貴との会合（後書き）

やばい、志貴のしゃべり方が・・・・
今回は明久の過去についてでした。
明「やっと僕のことが出てきたね」
うん。文才なくてごめんね・・・
明「大丈夫だけど・・・」
・・・首吊ってくるわ・・・
明「やめろ！！」
次回からＡクラス本編です。
この話の明久の持ってる七ッ夜ですがパラレルワールドの倉庫にあったのをお姫様の吸血衝動を抑えるためにいろいろと世界を飛び回り、たまたまたどり着いた志貴がうば・・・拾ってきた物です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2653z/

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月14日22時55分発行